

ソウル大学校蔵『同泰来信』の性格と成立過程：近代朝鮮華僑研究の端緒として

石川，亮太
佐賀大学経済学部

<https://doi.org/10.15017/25816>

出版情報：九州大学東洋史論集．32，pp.126-193，2004-04-30．九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：



ソウル大学校蔵『同泰来信』の性格と成立過程

——近代朝鮮華僑研究の手がかりとして——

石川 亮 太

一 はじめに

(1) 本稿の目的

19世紀末の東アジアでは、条約による自由貿易の制度的保障を前提として、対欧米貿易はもとより域内貿易も急成長した。そしてその主要な担い手の一つとなったのが、清国内外の開港場に進出した清国人商人（以下華商と称する）であった。東アジアで最も遅く自由貿易体制に参入した朝鮮でも、1883年に朝鮮清国間で締結された（主権国家間の条約ではないが自由貿易の保障という点でそれと同じ役割を果たした）商民水陸貿易章程に基づき、首都漢城（現ソウル）と三つの開港場（仁川・釜山・元山）に華商が進出するようになり、対清国貿易を中心に商業活動を展開した。

こうした朝鮮華商の活動については、従来の研究でも注目されてこなかったわけではないが、その視点は開港後とくに日清戦争前の朝鮮をとりまく国際情勢との関係に偏りがちで、華商自身の商業活動に即した分析はほとんど行われてこなかったといつてよい¹⁾。その理由の一つとして、この時期の朝鮮華商について得られる史料が少なく、日本

領事報告など官側の觀察記録に多くを依らざるを得ないという、史料的な制約の問題があるように思われる。

しかし実際には、華商自身の手による経営資料が全く残っていないわけではない。韓国ソウル大学校奎章閣に所蔵されている同順泰経営資料がそれである⁽²⁾。奎章閣の目録に従えば、その内容は、図表1のようである⁽³⁾。ここから分かるように、その規模はわずか30冊に過ぎないが、他に類例のない貴重な史料であることは疑いない。しかし、その存在は従来も知られてはいたものの⁽⁴⁾、内容が史料として検討・利用されたことは管見の限りない。そもそも史料的な性格自体がまだ明らかになっておらず、奎章閣の編集した解題目録でもごく不十分な紹介がなされているのみである⁽⁵⁾。

図表1 ソウル大学校奎章閣所蔵の同順泰経営資料

番号	資料名	冊数
奎27581	進口各貨艙口單	8冊
奎27582	甲午年各準來貨置本單	2冊
奎27583	乙未來貨置本	1冊
奎27584	同泰來信	19冊

(註)『奎章閣圖書韓國本綜合目録(修正版)』(1994年)に従った。

「番号」は奎章閣の請求番号である。

「資料名」は上記目録上の名称であり、実際の簿冊題名と異なる場合がある。

ソウル大学校蔵『同泰來信』の性格と成立過程(石川)

筆者自身も、これまでの研究のなかで、この同順泰経営資料を断片的に引用したことはあるが⁽⁶⁾、その史料性性格について本格的に分析したことはなかった。本稿では、そのような作業の第一歩として、図表1に示した同順泰経営資料の3分の2を占める『同泰来信』（奎章閣請求番号21584番）を取り上げ、その性格について検討することとした⁽⁷⁾。

（2）同順泰について

ここで資料の作成者である同順泰について、簡単に紹介しておきたい。

同順泰は、1880年代から1920年代にかけて漢城を拠点として活動した華商の商号名である。先述したように、朝鮮では1880年代から多数の華商が活動するようになったが、ここで取り上げる同順泰は、それら朝鮮華商の代表的存在としてしばしば先行研究にも言及されている。その経営内容にまで踏み込んで論じた研究はほとんどないが、同商号が1893年に朝鮮政府に借款を供与したことや、その見返りとして漢城仁川間の汽船航行権を獲得したことなどが、朝鮮に対する清国の政治的影響力が高まっていた日清戦争直前の状況を反映する事件として、取り上げられている⁽⁸⁾。

同順泰を創設したのは譚傑生という人物である⁽⁹⁾。譚傑生は1883年に広東省肇慶府の高要県に生まれた。この場所は広東省都の広州から西方約90 kmにあたり、代表的な華僑送出处として知られる珠江デルタの一部にあたる。彼が朝鮮に渡航した時期についてははっきりしないが、在朝清国商務委員の手による資料では1880年代の半ばから現れるから⁽¹⁰⁾、1882年に通商章程が締結された後、かなり早い時期から朝鮮で活動をしていたのは間違いない。

そして日清戦争までには、在朝広東省出身者による同郷団体のリーダーとなり、上述のような政治的活動にも関与する豪商に成長した。日清戦争後も植民地期に至るまで活動を続け、1920年代には、京城（旧漢城、現ソウル）の中

華総商会・広東同郷会の会長として名前が現れている。譚傑生が1929年に死去するとともに同順泰も閉店したようだが、彼がソウルの中心部に集積した広大な土地は、韓国独立後の1960年代に至るまで遺族が所有し続けたと言われている。

このように同順泰は、開港後における朝鮮華商の代表的存在であったといえる。それゆえその経営資料は、個別経営の事例に関する史料としてばかりではなく、当時の華僑社会全般に関わる史料としても重要だと思われる。

(3) 『同泰来信』(27584番)の概要と検討方法

先述したように、本稿では、現存する同順泰経営資料の3分の2を占める『同泰来信』(27584番)を扱う。『同泰来信』は、奎章閣目録上の資料名であるが、本稿でも便宜的にこの呼称を踏襲したい。また奎章閣の請求番号では19冊各冊に1～19の子番号を付している。本稿ではこれも踏襲するが、数字では各冊に収録されている文書各件に付す番号と紛れる恐れがあるため、子番号1をA冊とし、以下S冊までアルファベットを振りなおした。このアルファベット番号と奎章閣請求番号との対応関係については、図表2に示した通りである。

図表2 『同泰来信』の全体構成

簿冊名	奎章閣番号	冊子表題	収録書簡数
A冊	奎27584-1	同泰来信 上 / 己丑元月	20
B冊	奎27584-2	同泰来信 中 / 己丑元月／至二月	37

C 冊	奎27584-3	同泰来信	下	／己丑五月／至六月	65
D 冊	奎27584-4	同泰来信	單	／甲午元月／至四月	43
E 冊	奎27584-5	同泰来信	上	／甲午元月／至三月	59
F 冊	奎27584-6	同泰来信	中	／甲午三月／至五月	61
G 冊	奎27584-7	同泰来信	下	／甲午五月／至六月	30
H 冊	奎27584-8	同泰来信	上	／癸卯元月／至三月	52
I 冊	奎27584-9	同泰来信	中	／癸卯四月／至十月	56
J 冊	奎27584-10	同泰来信	下	／癸卯十月／至十二月	65
K 冊	奎27584-11	同泰来信	單	／乙巳正月／至七月	38
L 冊	奎27584-12	同泰来信	乾	／乙巳元月／至二月	38
M 冊	奎27584-13	同泰来信	坤	／乙巳二月／至四月	48
N 冊	奎27584-14	同泰来信	單	／乙巳／丙午	51
O 冊	奎27584-15	同泰来信	乾	／一月／至三月	52
P 冊	奎27584-16	同泰来信	坤	／三月	55
Q 冊	奎27584-17	同泰来信	單	／仁川来信	44
R 冊	奎27584-18	同泰来信	單	／同泰来信	40
S 冊	奎27584-19	同泰来信	單	／乙巳正月／至五月	35

(註)「冊子表題」の中のスラッシュ(／)は改行を示す

この『同泰来信』は、資料名からも想像できるように、書簡を整理して装丁したものである。具体的には、書簡を横に貼りつなげ、折本の形にして厚手紙の表紙を付すという形態をとっている。各冊には平均して50件程度の書簡が収録されている。製本後の大きさは、いずれも縦30cm×横25cm程度でいたい一定している。

各冊の表紙には表題が墨書されている。図表2にはその表題も示した。本表に示した表題中のスラッシュ（/）は改行を示す。ここから分かるように、各冊とも第1行に「同泰来信」の文字がみえ（これが奎章閣目錄上の資料名の由来であろう）、続けて乾・坤、上・中・下、単などの記号が見える。次に行を変えて干支と起点の月、さらに行を変えて終点の月が記されている。ただしO冊P冊には干支がなく、Q冊R冊には第2行以下に干支・月日ではなく「仁川来信」「同泰来信」という文言が見える点でやや異例である。

さて、これら各冊に収録されている書簡各件について整理したのが、後掲の付表A～Sである。付表の見方について項目ごとに説明しておきたい。まず最も左の列の「番号」は、筆者による書簡各件の整理番号で、冊子内の配列順序に従って01から振っている。以下個別の書簡に言及する必要があるときには、各冊のアルファベット番号と、この冊内番号とを用いて示す。例えばA冊の1番目に位置する書簡はA 01、B冊の20番目に位置する書簡はB 20といった具合である。

収録書簡の書式は様々だが、「某某先生台鑑」といった起首語にはじまり、「敬請台安、弟某某頓首、某月某日」といった結尾語で終わるものが多い。このような定型に従って抽出したのが左から2列目の「発信者」、3列目の「受信者」、4列目の「発信日」である。なお発信者名としては姓名自署に加えて商号名等の印影が見られる場合もある。これらの印影について本表では「」に入れて示した。また姓名の上に「弟」「侄」などの自称が付されている場合もあるが、これらは省略した。ただし受信者名については「某某仁兄」「某某叔台」などの尊称も含めて示した。また、特定の発信者から頻繁に書簡が送られる場合、発信者自身が「某号信」などの連番を振っている場合がある。このよう

な連番が付されている場合には、付表の左から5列目の「連番」の項に示した。

以下では、これら付表A～Sに基づき、収録書簡の傾向を分析することによって、各冊の性格、さらには『同泰来信』全体の性格について論じることにはしたい。ただし19冊各冊について論じると煩雑となりかねて全体像が見えにくくなる恐れがあるので、図表2に示した各冊表題中の干支の記載に基づいてグループ分けを行い、このグループごとに検討を行うこととしたい。

具体的には、19冊を己丑年グループ(A, B, C冊)、甲午年グループ(D, E, F, G冊)、癸卯年グループ(H, I, J冊)、乙巳年グループ(K, L, M, N, S冊)と、表紙に干支が記されていない不明グループ(O, P, Q, R冊)の5グループに分け、各グループにつき一節を当てる(第二～六節)。各節では、まず当該グループの収録書簡の構成を概観したうえで、各書簡の発信者についての検討にすすみ、最後に小結として当該グループ全体の性格を検討する。第七節では第二～六節を踏まえて『同泰来信』全体の性格と成立過程を論じる。

二 己丑年グループの検討

(1) 構成

己丑年グループ3冊(A, B, C冊)表題の第1行目には、それぞれ「上」「中」「下」の記号が見えることから、この3冊が一セットとして扱われていたことが分かる。

収録書簡の件数は、A冊が20件、B冊が37件、C冊が65件で、合計122件である。付表A～Cから分かるように、各冊内の書簡の配列は基本的に発信日付順である。仔細に見ると、A冊には一月三日付から一月十日付までの書簡が、

B冊には一月十七日付から始まり二月十三日付（B 35）まで至った後、やや飛んで五月九日付（B 36）の書簡が、C冊には五月一〇日付から六月二日付までの書簡が収録されている。つまり各冊内だけではなく、A、B、Cの順で冊子を越えて連続する形で書簡が配列されており、3冊全体では（B冊の途中で3ヶ月弱の欠落をはさみながら）一月上旬から六月上旬までに発信された書簡が収録されている。なおこのような収録書簡の発信日付の範囲は、各冊表題の「元月」「元月至二月」「五月至六月」という記載とおおむね一致する。

収録書簡の年代については、A 01の発信日に「己丑」の記載があり、A 02以下の書簡は上述のように発信日付順に配列されているから、全体として表題どおり己丑年発信の書簡が収録されているとみてよいだろう。先述のように同順泰が活動したのは1880年代から1889年代までであることを考えると、この間の己丑年は光緒十五年（1889）年にあた

る。
収録書簡の発信者については、3冊いずれも「仁庄」とするものが圧倒的に多い点で共通し、グループ内で合計すれば122件中118件が「仁庄」発の書簡である⁽¹²⁾。一方受信者については、左の「仁庄」発の書簡の全てが、「漢庄」ないし「漢庄本号」を受信者としている。

（2）発信者別の検討

（a）「仁庄」発の書簡（118件）

先述のように、これらの書簡の受信者はすべて「漢庄」ないし「漢庄本号」である。受信者名いずれにも「庄」字が入っているが、庄は荘の別字で、ここでは商店の意味で用いられているものと思われる。仁・漢は地名の略称だと思われるが、当時の朝鮮では仁川・漢城の両地に華僑が集中していたことを考えれば、仁を仁川、漢を漢城に比定

してよいだろう。そして商号名を異にする商店に書簡を送る場合、自身と相手の商号名を明記しないとは考えにくいから、これらの書簡は、同順泰の店舗間でやり取りされたものと見るのが妥当である。つまりこれらの書簡は、仁川の同順泰分号から漢城の同順泰本号へ宛てられたものと見るができる。

この「仁庄」発の118件中、105件には「某号信」の形で冒頭行に連番が振られている（残り13件のうち4件は「不列号」として連番の体系から外れることが明示されている。7件には何の表示もなく、2件は冒頭行が破損して読み取ることができない）。この連番は、一月三日の1号（A 01）に始まり、六月二十九日の150号（C 63→C 65）に至るまで、年初から時系列的に振られている。ただし同じ日に2通以上の発信がある場合は、数字自体は変えず、「続某号」「又某号」という形で番号が振られているようである（例えば上述の150号は同日中に3通が発信されており、後で出された2通については「続150号」と番号が振られている）。この通し番号には欠落がほとんどないが、B 冊の末尾で発信日が3ヶ月ほど離れているB 35とB 36（二月十三日付と五月九日付、何れも「仁庄」発「漢庄本号」受）を見ると、B 35が42号、B 36が続108号となっており、この期間に発信された「仁庄」発の書簡が欠落していることが推測される。（b）その他の発信者からの書簡

発信者について一定の推測が可能な2件について挙げておく。

C 54には発信者の自署が見られず、「仁川同順泰書柬」の印影のみが見られる。受信者は「漢庄本号列位先生」である。「仁庄」発の書簡と同じく、仁川同順泰からの漢城同順泰宛ての書簡と見てよいだろう。なお書簡冒頭には「不列号」の文字があり、「仁庄」発の書簡に振られた連番が意識されていると分かる。

C 45は発信者を「以莊」受信者を「傑生三兄」としている。具体的な序列を示す「三」字が見えることで、受発信者間に現実の親族関係を想定してもよいように思われる¹³⁾。仁川駐在の清国商務委員による在留清国人名簿によれば、光緒十二年分名簿に「譚以莊」という人物が見え、同一人物の可能性がある¹⁴⁾。

(3) 小結

己丑年グループの3冊には、光緒十五(1889)年の一月上旬から六月上旬にかけて、主に仁川の同順泰分号から漢城の同順泰本号に宛てて送られた書簡が収録されている(ただし二月中旬から五月上旬までに発信された書簡は欠落している)。それら書簡は冊子間を越えて発信日順に配列されている。このようにこの3冊には共通点が多く、また冊子表題の記号から、この3冊が表題の記入された当初から一つのセットとして意識されていたことが分かる。

三 甲午年グループの検討

(1) 構成

表題に「甲午」の干支が見えるD, E, F, Gの4冊を仮に甲午年グループと分類した。ただしこの4冊の中でも、E, F, Gの3冊は表題第1行の記号がそれぞれ「上」「中」「下」で、セットとして扱われているように思われるのに、D冊のみは「単」の記号が付され、前者3冊とは区別されている。

収録書簡の数は、D冊43件、E冊59件、F冊61件、G冊30件で、合計すると193件となる。各冊中の書簡の配列は、付表D, E, F, Gから分かるように、いずれも概ね発信日付順となっている。具体的にいえば、D冊は(やや入れ替わりがあるが)十二月十九日付く四月十二日付、E冊は一月十九日付く三月十一日付、F冊は三月十二日付く五月十五日付、G冊は五月十七日く六月五日となっている。つまりE, F, G冊では、この3冊を通じて発信日付が連続

しているのに対し、D冊ではそれら3冊とは（時期的に並行しながらも）独立した配列が行われているといえる。

発信年については、D冊では、十二月二日付のD 03に「癸巳」の文字が見え、D 06より後の一〇四月付の書簡では多くに「甲」「甲午」の文字が見えることから、癸巳年末から甲午年四月までの書簡が収録されていると見てよい。

E, F, G冊では干支を記載する書簡は少ないが、E 05, E 25, F 17, F 31, F 32の5件に「甲」の文字が見え、それ以外の書簡は発信日付順に配列されているから、すべて甲午年の書簡が収録されていると見てよく、より詳しくは表題の記載どおり甲午年の書簡が収録されている可能性が高いだろう。前節同様に同順泰の活動期間から考えると、この癸巳年・甲午年はそれぞれ光緒十九（1893）年、光緒二〇（1894）年を指すと見てよいだろう。

発信者を見ると、D冊では「何挺生」（10件）「劉時高」（10件）「羅明階」（11件¹⁵）が主要な発信者である。それに對してE, F, G冊にはこれらの発信者はほとんど現れない。かわって「仁棧」（E冊20件、F冊11件、G冊5件）、「晴湖」（E冊7件、F冊15件、G冊13件）などが主要な発信者となっており、これらは逆にD冊ではほとんど現れない。ただし受信者の点では4冊いずれも「傑生」が最も多い点で共通している（D冊35件、E冊45件、F冊40件、G冊30件）。

このように書簡の配列方法と発信者の2点で、D冊とE, F, G冊の間には相違がある。そしてこれは、上述した表題第1行の記号の相違とも対応する。そこで次の（2）では、D冊とE, F, G冊とを区別して論じることにした。

（2）発信者別の検討

① D冊について

(a) 「何挺生」発の書簡(10件)

一月から二月の間に集中して10件を見ることができ、これらの書簡の発信者名には「同順泰書束」の印影も見え、また1件(D 21)には「全州」の文字も添えられている。このことから、何挺生は全州の同順泰分号からこれらの書簡を送信していた可能性が高い。全州は朝鮮南西部にあたる全羅道の主要都市である¹⁶⁾。なお「何挺生」発の書簡以外に、全州同順泰を発信者とする書簡が2件見られるが(D 10, D 16)、これらも何挺生の手にかかるものかは判断できない。受信者は不明の1件(D 15)を除き全て「傑生仁兄大人」である。なおこれら何挺生からの書簡では、3件を除いて冒頭に「某号信」等の連番が見え、1号から7号までが欠落なく確認できる。

(b) 「劉時高」発の書簡(10件)

癸巳年十二月から甲午年四月まで、本冊の収録期間全体にわたって見ることができ、宛先は全て「傑生仁兄大人」である。D 28では「同順泰書束」の印影が見られることから、同順泰の店員であったと考えられるが、発信地については明記されていない。しかし内容から判断すれば、この人物は当初、栗浦同順泰で米の買い付けなどに当っており、甲午年二月に前述の何挺生が仁川に向かったのを受けて、全州同順泰を引き継いだということが分かる(D 28, D 33より)。それゆえこれらの書簡も、それら全羅道の同順泰分号からの発信とみてよいだろう。なお栗浦は全州から10 kmあまり北西の万頃江沿いに位置し¹⁷⁾、全州と仁川の間の水運の中継地となっていたと考えられる。

(c) 「羅明階」発の書簡(11件)

この人物を発信者とする書簡も、「劉時高」発の書簡と同様、癸巳年十二月から甲午年四月にかけて見ることができ、受信者は2件を除いて「傑生仁兄大人」である¹⁸⁾。この発信者についても詳細は不明だが、内容からみると上述の劉時高・何挺生らと連絡をとりあって全羅道方面での米買い付けに携わっていたと推測できる。とくに三月十五日付のD 29からは、全州に移った劉時高のかわりに栗浦同順泰に移り、仁川向けの米移出に携わっていたことが分かる。

それゆえこれらの書簡も、「劉時高」発の書簡と同様に、全羅道の同順泰分号から発信されたものとみてよいだろう。

(d) その他の発信者の書簡

後述のE, F, G冊と重なる発信者が4件のみ確認できる(「仁棧」2件「仁棧廷彰」1件「邵蘭圃」1件)。またD 17は発信者名が判読できないが、「同順泰書柬」の印影があり、同順泰のいずれかの分号から発信されたものと思われる。同順泰外からの発信としては、D 02の玉階(横浜福和号)からの書簡がある。

② E, F, G冊について

(a) 「仁棧」発の書簡(36件)

発信者名に「仁棧」を含む書簡は36件ある。うち単に「仁棧」とするのは30件で(そのうち7件にはあわせて「同順泰書柬」の印影が見える)、他に「仁棧同順泰」1件、「仁棧廷贍」4件、「仁棧廷彰」1件が見られる。このように「同順泰」の文字が見えることから、これらは仁川同順泰からの発信と判断してよいだろう。一方これらの書簡の受信者としては「傑生叔台大人」(34件)「漢同順泰」(1件)「漢本号」(1件)「同順泰本号」(1件)があり、全て譚傑生本人ないし漢城の同順泰本号に宛てられたものと思われる。

(b) 「廷贍」発の書簡(13件)

上述の「仁棧」発の書簡中、4件は発信者名を「仁棧廷贍」としていたが、それ以外に発信者名を単に「廷贍」とする書簡が13件ある。廷贍について詳細は不明だが、仁川同順泰の店員と考えられるから、「仁棧」発の書簡と同じく仁川同順泰より発信されたものと見てよいだろう。受信者は1件が「本号」で漢城同順泰に宛てられているほか、残り12件は「傑生叔台大人」で、譚傑生本人に宛てられている。

(c) 「晴湖」発の書簡(35件)

発信者名を「晴湖」とする書簡は35件である。そのうち2件に「仁川同順泰書柬」の印が見られ、その他の書簡についても内容には仁川市場での取引に関する記述が多いことから、仁川同順泰から発信されたものと思われる。一方受信者は全て「傑生三弟」で、譚傑生個人に宛てられた書簡である。具体的な序列を示す「三」字が見えることから、「晴湖」と譚傑生とは、擬制ではない実際の親族関係にあったと見てよいように思われる⁽¹⁹⁾。なお先にも引いた清国商務委員作成の名簿によれば、光緒十二(1886)年分仁川名簿に「譚晴湖」なる人物が現れている⁽²⁰⁾。本籍地も譚傑生と同じ広東省高要県である。上述のように「晴湖」が譚傑生と親族関係にあると考えれば、この名簿に現れる譚晴湖が「晴湖」と同一人物である可能性は高いものと思われる。

(d) 「譚傑生」「傑生」「傑」発の書簡(30件)

これら30件をまとめて譚傑生発の書簡と見做した。受信者は「泉享仁兄」、「蘭圃仁兄」⁽²¹⁾、あるいはその連名である。発信地は明確には示されていないが、内容から判断すれば、仁川同順泰へ出張した譚傑生が漢城同順泰に宛てて送ったものと考えられる。とすれば受信者の2名は、譚傑生の留守を任された漢城同順泰の店員だと見ることができよう。

(e) 「李泉享」発の書簡(12件)

この12件の受信者は全て「傑生叔台大人」で、譚傑生に宛てられたものである。発信地については明示されていないが、内容は大半が仁川の市況に関するものである。また先の「晴湖」発書簡の1つ(G04)では、「今仁号人少、祈来信着泉享・廷章、努力辦事」とあり、「泉享」なる人物が仁川同順泰で働いていたことが分かる。これらから、この「李泉享」発の書簡は、仁川同順泰から発信されたものと推測できる⁽²²⁾。

(f) その他の発信者の書簡

上で挙げたほかに同順泰店員と考えられる発信者は、「廷章」(2件)「何挺生」(1件)羅明階(1件)である。「廷

章」は上の(e)に引用したG 04に仁川同順泰の店員として登場している。「何挺生」「羅明階」はD冊での検討から同順泰の店員と確認できる。また「以莊」(1件)は先にみた己丑年グループC 45に現れており、既述のように譚傑生の親族と思われる。これらの書簡の受信者は、(尊称の表現に相違はあるが)譚傑生である。

また逆に同順泰外の商店からの書簡と確認できるものとしては、「陳如三」発の9件と「周夢龍」発の1件がある。まず「陳如三」発の書簡から検討しよう。この9件のうち8件には「仁川怡生号書柬」の印影が見え、仁川に店舗を構える華商であったことが確認できる。この陳如三の名は、清国商務委員による仁川清国人名簿でも、光緒十(1884)年分と十二(1886)年分とに現れる²³⁾。それによれば本籍地は広東省香山県であった。次に「周夢龍」発の書簡には、「仁川義生盛書柬」の印影が見え、陳如三と同じく仁川に店舗を構える華商であったことが確認できる。この人物の名も光緒十二年分の仁川清国人名簿に現れ、それによれば本籍地は広東省開平県であった²⁴⁾。

(3) 小結

甲午年グループ4冊のうち、D冊(①グループ)とE, F, G冊(②グループ)とは表題の記号で区別されている。収録書簡を見ると、発信日の範囲は①②間で重なっているが(①は光緒十九年末から二〇年四月まで、②は3冊を通じて光緒二〇年一月から六月まで)、発信者が重なっていない。ただし受信者の点では①②とも譚傑生ないし漢城同順泰に宛てられた書簡が圧倒的に多い。

①②の発信者の傾向について、その所属する店舗に注目して比較すると、①では全羅道に属する全州・栗浦の同順泰分号から発信されたと見られるものが多く、一方②では仁川同順泰分号からの発信と見られるものが多い²⁵⁾。つまり①②は、同順泰の分号から本号(ないし譚傑生)に宛てられた書簡を、分号所在地にしたがって分類・整理したも

のと見ることができ、表題の記号における区別もこれに対応しているといえる。

四 癸卯年グループの検討

(1) 構成

表題に「癸卯」の表示があるのは、H, I, Jの3冊である。この3冊の表題にはそれぞれ「上」「中」「下」の記号が見られ、一つのセットとして扱われていたと思われる。

これら各冊の収録書簡の数は、H冊52件、I冊56件、J冊65件で、合計173件である。配列は、概ね発信日付順である。具体的にはH冊が一月十三日付く三月二〇日付、I冊が四月二日付く十月八日付、J冊が十月九日く十二月二八日となっており、発信日付の配列が3冊を通じて連続していることが分かる。

発信年については、多くの書簡の発信日付に「癸」ないし「癸卯」の記載があり、干支の記載がない書簡についてもそれら記載がある書簡と発信日付順で配列されていることから、全て表題通り癸卯年発信の書簡だと見てよいだろう。例によって同順泰の活動期間から考えると、この癸卯年は、光緒二九(1903)年を指すものと思われる。

発信者について見ると、本グループ173件のうち130件が「李益卿」発の書簡である⁽²⁶⁾。一方で受信者は九月下旬まではほとんどが譚傑生だが、それ以後には譚傑生は現れず、「象喬」が主たる受信者となる。この点については以下で再論する。

(2) 発信者別の検討

(a) 「李益卿」発の書簡(130件)

先述のように、癸卯年グループの収録書簡173件のうち130件を占める。このうち5件には発信者名と共に「仁川同順泰書束」の印影が見え(I 32, 37, 38, 41, J 17)、李益卿が仁川同順泰の店員であったことが推測される。また後年になるが、乙巳(1905)年一月二六日付の元山同豊泰発の書簡(N 10)では「仁号李益卿兄不幸喪身」という記述が見られ、李益卿が癸卯年後も仁川同順泰で働き続け、在職のまま死亡したということが推測できる⁽²⁷⁾。

さてこの「李益卿」発書簡の受信者は、一月から九月中旬まではほぼ全て「傑生大兄大人」であるが(H 03~149, 2件を除く)、九月下旬から以後は「象喬仁兄大人」に変わる(I 50~J 65)。付表H, I, Jから分かるように、この「李益卿」以外の発信者からの書簡についても、九月下旬を境に受信者が譚傑生から「象喬」なる人物に変わる。

九月下旬の「李益卿」発書簡の内容を見ると、譚傑生はちょうどこの頃から家族を連れて広東省の郷里へ帰省の途に就き、少なくとも年内いっぱい朝鮮に戻ってこなかったようである(I 50, I 52, J 03, J 54)。これが同時期から譚傑生あての書簡が見られないようになった理由だと思われる。一方で後述の「何介眉」発の十一月の書簡では(J 24, J 37)、受信者名として「漢庄本号 譚象喬仁兄」の名が挙がっており、「象喬」の姓が譚であり、この頃漢城の同順泰本号にいたということが確認できる。このことから、譚傑生が九月から帰省するに当たって、(親族の?)⁽²⁸⁾ 譚象喬に漢城本号の運営を任せたものの推測できる。それゆえ九月下旬以後の「象喬」宛ての書簡も、それ以前の譚傑生宛ての書簡同様、漢城同順泰本号に宛てて送られたものと見てよいだろう。

(b) 「何介眉」発の書簡(11件)

四月に1件見られるほか、残り10件は十月以降に集中している。J 24には何介眉の署名とともに「仁川同順泰書束」

の印影が見られることから、この人物も李益卿と同様に仁川同順泰の店員であったものと考えられる。受信者は、先に「李益卿」発書簡の説明でも触れたように、四月の1件は「傑生叔台大人」であったのが、十月以後の10件では「象喬仁兄大人」ないし「漢庄本号 譚象喬仁兄」となる。

(c) 「仁川同順泰」発の書簡(8件)

上の「李益卿」「何介眉」発の書簡は仁川同順泰からの発信だと思われるが、そのほか「仁川同順泰書東」の印影のみが見られ発信者の署名が見られないものが8件ある⁽²⁹⁾。受信者は譚傑生とするものが2件、譚象喬とするものが1件、のこりは漢城同順泰である。これらのうちJ 10, J 13, J 25, J 56の4件は書簡ではなく、仁川同順泰から漢城同順泰へ送った貨物のパッキングリストで、本来はこの簿冊の中に入るべきものではないように思われる。残りの4件は通常の書簡で、内容は仁川市況や取引状況に関する報告である。

(d) 「古達庭」発の書簡(11件)

この人物を発信者とする11件のうち10件は二月から六月の間に集中し、その受信者は全て「傑生仁翁大人」である。のこり1件は十一月十九日付で受信者は「象喬仁兄」である。書簡の内容からみると、古達庭は平壤の外港である鎮南浦(1894年開港)において、同順泰が鎮南浦の居留地を持つ借地権を転売するにあたり、代理人として交渉を行っていたようである。ただし彼が同順泰の店員であったかどうかは確認できない。

(e) その他の発信者からの書簡

これ以前のグループにも現れていた発信者として、「傑生」(4件)、「廷廣」(1件)がある。またI 15の「周子齊」については詳細不明だが、甲午年のE 25と同じ「仁川義生盛書東」の印影が見られる。

(3) 小結

癸卯年グループの3冊は、光緒二九（1903）年の一年間にわたり、仁川同順泰から漢城同順泰に宛てて送られた書簡を中心に、発信日付に配列して製本したものである。漢城同順泰での受信者は、九月下旬まで譚傑生本人であったが、彼が帰郷して不在になった後は、留守を預かる店員かつ親族と思われる譚象喬となった。またこの3冊は、表題にそれぞれ「上」「中」「下」の記号が見え、表題の記された当初からセットとして扱われていたことが分かるが、そうした扱いは上のような発信者の共通性と符合している。

五 乙巳年グループの検討

（1）構成

表紙に乙巳の文字が見える冊子はK, L, M, N, Sの5冊に及ぶ。これら各冊の収録書簡数は、K冊38件、L冊38件、M冊48件、N冊51件、S冊35件で、合計210件である。

この5冊のうちL, M冊の表題にはそれぞれ「乾」「坤」の記号が、他の3冊の表題には「単」の記号が見える。このことからL, M冊はセットとして、他の3冊はそれぞれ独立した冊子として扱われていたことが推測できる。

収録書簡の配列方法と受信者の傾向は、冊子ごとに相違している。まず表題の記号上セットとして扱われているL冊とM冊では、概ね発信日順に配列されている。発信日の範囲はL冊が一月四日付～二月十八日付、M冊が二月十一日付～四月七日付で、2冊を通じて配列が連続していることが確認できる。なお発信日付には多くに「乙」の字が見え、表題どおり乙巳年発の書簡であることが推測される。同順泰の活動期間から考えれば、これは光緒三二（1905）

年にあたる。発信者は2冊とも「譚象喬」「象喬」が多く（L冊27件、M冊33件）、受信者は譚傑生が多い（L冊M冊とも33件）。

またK冊でも概ね発信日順に書簡が配列されている。発信日の範囲は一月五日付〜七月九日付で、L、M冊と一部が重なっている。本冊に収録された書簡の多くには発信日に「乙巳」ないし「乙」の干支が明記され、表題どおり乙巳年の書簡であることが確認できる。発信者は「李静波」（29件³⁰）「群枝」（6件）「李偉初」（3件）の3人で、L、M冊の発信者とは互いに全く重ならない。一方で受信者は全38件中37件が譚傑生であり、譚傑生が受信者の多くを占める点はL、M冊と同様である。

このようにL、M、Kの3冊では書簡が発信者を問わず発信日順に配列される傾向が強いのに対し、S冊ではまず発信者ごとに書簡を分けた上で、発信者を同じくする書簡の中で発信日付順に配列しているようである（入れ替わっている部分もある）。なお発信日は一月より六月までにわたっており、「自一月至五月」という表紙題名とは若干の齟齬がある。年については4件の発信日に「乙」の文字が、1件の発信日に「乙巳」の文字が見え、表題どおり乙巳年の書簡が収録されている可能性が高いが、他の書簡が発信日付順に配列されていないこともあり、断言はできない。受発信者の傾向を見ると、発信者は多様で最も発信の多い人物でも35件中14件にすぎないが（「梁綸卿」）、受信者は譚傑生が35件中34件と多数を占めている点はK、L、Mの3冊と同様である。

最後にN冊は、表題の干支が「乙巳丙午」とされており、他の4冊には「乙巳」のみしか記されていないのと異なる。書簡の配列方法は、S冊と同様に発信者ごととなっている部分もあるが、S冊に比べ混乱が著しく、一定の基準を見出すことができない。また年代は、発信日に干支を明記しているものを見ると、表題と一致する「乙巳」「丙午」（ないし「丙」）が多いものの、「甲」とされている書簡もあり（N14、15）、少なくとも三カ年分にわたることが確実である。「丙午」は乙巳翌年の光緒三十一（1906）年、「甲」は乙巳前年の光緒三〇（1904）年を指す可能性が高いと思

われる。受発信者の傾向を見ると、発信者はS冊よりさらに多様で、最も発信の多い人物でも51件中13件にすぎないが（「李瑞雲」「瑞雲」）、受信者は譚傑生が51件中43件と多数を占めている点はK, L, M, Sの4冊と同様である。このように乙巳年グループ各冊内での書簡の構成は、L, Mの2冊に共通点が多く配列も連続しているのに対し、他の3冊はそれぞれに独自の特徴を持っている。これは先述した表題の記号（乾・坤・単）とも対応している。そこで（2）の発信者の検討ではL, M2冊をまとめて取り上げ、他のK, S, N冊についてはそれぞれ1冊ずつ検討したい。

（2）発信者別の検討

① L, M冊について

（a）「譚」象喬」発の書簡（60件）

発信者名を「譚象喬」ないし「象喬」とする書簡は60件あり、L, M冊の86件の書簡中、7割弱を占めている。なおこの60件のうち8件には発信者名とともに「仁川同順泰書東」の印影が見え、仁川同順泰からの発信であったことが確認できる。この譚象喬については、癸卯年グループの検討で「李益卿」発書簡の受信者として登場した時に取り上げたが、同順泰の店員でありかつ譚傑生の親族であったと推測される。

受信者は60件中48件が「傑生三叔大人」である。その他は「秋明賢侄」が5件、「其■「渠？」賢侄」が3件、「其新賢侄」が2件、「同順泰本号列位先生」が1件、記さないものが1件である。これらのうち「秋明賢侄」を受信者とするM33には「本号同事先生」という語が、「其■「渠？」賢侄」を受信者とするM32には「漢本号列位先生」という語が受信者名に添えられていることから、これらの人物は漢城の同順泰本号の店員であったと推測できる。なお「秋

明賢侄」宛ての M 33 では、本文中に「譚傑生は昨晚仁川に到着した」旨の記述が見られ、譚傑生不在時の代理としてこれらの人物が受信者とされていたと推測される。

(b) その他の発信者からの書簡

これまでに紹介したグループで既に現れた発信者として、「晴湖」(5件、うち1件には「仁川同順泰書東」の印影あり)「延廣」(1件)「仁川同順泰」(2件)がある。いずれも譚傑生ないし漢城同順泰に宛てられている。これまでに見られなかった発信者としては、朝鮮在勤の清国領事からの書簡8件が興味深い。具体的には黎子祥(元山領事)からの6件が多く、他に唐恩桐(鎮南浦領事)から1件、錢明訓(漢城総領事)から1件が発信されている。受信者はいずれも譚傑生ないし同順泰本号である。

② K 冊について

(a) 「李静波」発の書簡(29件)

全38件中29件を「李静波」発の書簡が占める。発信者の自署とともに「群山同順泰書東」の印影が見えることから、群山同順泰から発信されたものと考えられる。受信者は(受信者名が損傷して判読できない K 03 を除き)全て「傑生叔大人」であり、漢城本号の譚傑生のもとに送られたものと考えられる。発信地の群山は1897年に開港された全羅道北部の海港である。群山に同順泰分号が設置されたのがいつかは不明だが、癸卯年十二月十三日付けの仁川同順泰(李益卿)発の書簡で(J 53)、「群庄」「李静波」の文字が見えることから、遅くとも日露戦争以前には開設され、李静波なる人物もその時までに同地分号で働いていたということが分かる。

この李静波からの書簡では、(K 35 を除き)冒頭行に「某号某日付某呈」という形で、連番と発信日、経路が示されている。付表ではこのうち連番を示した。本冊で最初に現れる「李静波」発書簡(一月七日 K 03)は損傷で冒頭行

が判読できないが、次の一月十一日付 K 04 は 304 号とされ、以後七月九日付の 330 号までが欠落無く連続している。概ね一週間に一度ぐらいのペースで発信されていたといえる。

(b) 「群枝」発の書簡(6件)

一月から二月の間に集中して6件見られる。発信者自署とともに「全州同順泰書柬」の印影が見られることから、全州同順泰から発信されていたことが分かる。受信者は全て「傑生叔台大人」である。この群枝発の書簡も、李静波発書簡と同様に、冒頭行に連番と発信日・遞送方法が記されている。連番は、損傷が激しく判読できない1例(K 02)を除き、一月■〔判読できず〕日が18号で、以下(19号と20号は欠落しているが)21号から24号まで続いている。

(c) 「李偉初」発の書簡(3件)

1件が二月、残りの2件は七月上旬の発信である。この「李偉初」発の書簡では、所属する商号の印影などが見られない。ただ七月二日付の K 37 では、冒頭行に「書於南浦」とあり、平安道の開港場である鎮南浦から発信していたことが分かる。内容からこのときの鎮南浦旅行は、租界の土地競売に参加するためであったことが分かる。ただしこの人物が同順泰の店員であったかは確認できない。受信者は、二月発の1件が「傑生叔台大人」、七月発の2件が「傑生仁兄大人」である。

③ S 冊について

(a) 「梁綸卿」発の書簡(14件)

二月中旬から六月下旬までの発信日付を持つ14件である。すべて発信者署名とともに「同泰号書柬」の印影が見える⁽³¹⁾。署名がなく「同泰号書柬」印影のみの書簡(S 26)をあわせれば15件となる。これらの書簡の受信者は、S 26を除き全て「傑生内弟・象喬内侄」で、漢城本号の譚傑生・譚象喬のもとに送られた書簡だと判断できる。そして「内

弟」(妻の弟)「内侄」(妻の甥)という呼称は、梁綸卿が譚傑生の一族と姻戚関係にあったことを窺わせる。なお発信者である同泰号(梁綸卿)については、前稿で既に取り上げたことがあるが、上海における同順泰の主要な取引先であつたと考えられる⁽³²⁾。

この「梁綸卿」発の書簡は、冒頭行に連番・発信日・通送方法(船便名)を記す形をとっている。連番は二月十九日付の621号にはじまり、六月二四日の633号まで欠落なく続いている(なおその間の四月二三日付S 25は「不列号」とされ、この連番体系の外にあることが示されている。また四月二二日付S 26は番号がないが、これは数行のメモ書きであり、同日付S 24の迫伸的な性格のものではないかと思われる)⁽³³⁾。

(b)「羅子明」発の書簡(5件)

三月上旬より六月上旬までの発信日付を持つ5件である。発信者署名とともに「香港上環安和泰書東」の印影が見える。受信者は「傑生仁兄大人」である。香港の取引先から漢城の譚傑生のもとに送られた書簡と考えてよいだろう。なお安和泰については1885年の日本領事報告に記載があり、それによれば香港の南北行街に店舗を持ち、主に神戸・横浜からの輸入海産物を扱う貿易商であつた⁽³⁴⁾。これらの書簡にも先述の「梁綸卿」発の書簡と同様、冒頭行に番号と日付が記載されている(ただし船便名は記されていない)。番号は86号から90号まで欠落なしに続いている。

(c)「陳達生」発の書簡(3件)

三月から四月にかけて3件見られる。発信者署名とともに「神戸祥隆号書簡」の印影が見られる。受信者は全て「傑生仁兄大人」である。この陳達生についても前稿で取り上げたが、神戸における同順泰の取引先の一つであつた。本籍地は広東省順徳県で、1870年に渡日後、神戸の広東人団体である広業公所理事もつとめた有力華商であつた⁽³⁵⁾。

(d)「潘達初」発の書簡(2件)

三月二一日(S 05)と四月八日(S 06)の2件である。発信者署名とともに「長崎万昌和」の印影が見られ、長崎

における同順泰の取引先華商と考えられる。受信者はいずれも「傑生仁兄大人」である。長崎の「重建広東会所碑記」によれば、この潘達初は広東省南海県の出身で、1915年当時、長崎の広東人団体である合福堂広東会所の会員であった⁽³⁶⁾。

(e) 「羅耀箴」発の書簡(3件)

いずれにも「元山同豊泰書柬」の印影がみえる⁽³⁷⁾。受信者は「傑生仁兄大人」である。この羅耀箴は、清国商務委員が作成した光緒十二(1886)年分の元山在留清国人名簿に、広東省出身の「在港設舖華商」として登場している⁽³⁸⁾。ここから、譚傑生と同じく広東省出身であることと、開港直後から元山に定着していたことが確認できる。

(f) その他の発信者からの書簡

K冊にも登場する「群枝」(1件, S 01)発の書簡は一月二三日付で、20号信の連番が打たれている。K冊「群枝」発書簡の中に20号信は欠けており、本来はK冊に入るべきものがこのS冊に紛れ込んだものと見てよいだろう。

秀枝(1件, S 18)も詳細不明だが、書簡の内容は鎮南浦における同順泰権利地の賃貸に関するもので、鎮南浦から発信されたものであると推測される。また書簡中で「宗弟」と自称しているが、同年七月にやはり鎮南浦から発信されたと思われる李偉初発の書簡(K 37)では土地の賃料を「譚秀枝」に手交した旨の記述があり、これらから「秀枝」の姓名は譚秀枝で、譚傑生の親族であったことが推測できる。

④ N冊について

(a) 「李瑞雲」「瑞雲」発の書簡(13件)

13件中11件に「仁川同順泰書柬」の印影が見られ、仁川同順泰から発信したものと思われる。発信日には全て「丙午」ないし「丙」という形で干支が記されている。書簡の配列は必ずしも発信日付順ではないが、発信日は三月二日

から四月二二日の約2ヶ月間に集中している。受信者は「傑生叔台大人」である。

(b) 「李静波」発の書簡(8件)³⁹⁾

発信者名とともに「群山同順泰書束」の印影が見え、群山同順泰から発信されたものと思われる。受信者は「傑生叔大人」である。発信日付は(判読不能の2件を除き)乙巳年七月から九月である。これら「李静波」発書簡の冒頭行には連番・発信日付・通送方法が明記されており、連番は333号から360号までである(ただし途中に欠落がある)。先述したK冊の「李静波」発書簡も同じ乙巳年発で、連番は304号から330号までだから、本冊の「李静波」発書簡はK冊所収の「李静波」発書簡の後に続くものだとはいえる。

(c) 「梁綸卿」発の書簡(7件)

発信者名とともに「同泰号書束」の印影が見られる。受信者は「不列号」1件(N 08)と破損して判読不能の1件(N 01)を除いて「傑生内弟象喬内侄」である。冒頭行には連番と発信日、通送方法(船便など)が記されている。これらの特徴は、先に見たS冊の「梁綸卿」発の書簡と共通する。この2冊の「梁綸卿」発書簡について連番を比較すると、本冊分は一月七日付の616号(N 05)から二月六日付の620号(N 12)まで、S冊分は二月十九日付(S 19)から六月二四日付(S 33)までだから、本冊分の書簡はS冊分の前に位置づけられるものといえる。

(d) 「羅耀箴」発の書簡(3件)

発信者名とともに「元山同豊泰書束」の印影が見られる。受信者は「傑生仁兄大人」である。発信日は十二月二六日(N 03)、一月十八日(N 09)、一月二六日(N 10)である。これらには干支が記されていないが、書簡本文中に日露戦争の話題が触れられ、かつN 10には日本が既に旅順を占領した旨が記されているから(旅順陥落は1905年1月1日)、この3件は甲辰年末から乙巳年初にかけてのものとみてよいだろう。

(e) 「羅子明」発の書簡(2件)

乙巳一月六日付のN 06、一月十九日付のN 07がある。前者には発信者名と共に「香港上環安和泰書東」の印影が見られる。受信者はいずれも「傑生仁兄大人」である。書簡冒頭には連番が振られており、N 06は84号、N 07は85号とされている。先述のS 冊にも同人発の書簡が5件あり、それらに振られている連番は86号から90号までだから、本冊の「羅子明」発書簡はその前に接続するものだといえる。

(f) 「仁庄」発の書簡(1件)

発信者名を「仁庄」とし受信者名を「漢庄本号」とする1件が含まれている(N 41)。書簡冒頭には連番(66号)、発信日(三月十日)、通送方法が明記されている。この受発信者名は、ここまでに紹介した冊子では己丑年グループにしか現れていない。この書簡の発信日には干支が明記されていないが、文中に「広済船」についての記述が見られる。広済号は、清国招商局の上海・仁川航路(1888年～1894年)に充当された汽船であり⁽⁴⁰⁾、このような内容面から書簡が日清戦争以前のものであることが推測できる。

(3) 小結

先述のように乙巳年グループの5冊は、表題記号から、4つの小グループに分けて扱われていたものと思われる(①L, M 冊、②K 冊、③S 冊、④N 冊)。書簡の配列や発信者の特徴も、実際にこの小グループに対応して異なっている。(2)の検討を踏まえて整理すれば、次のようである。まず①L, M 冊は仁川同順泰の譚象喬から漢城同順泰の譚傑生に宛てて送られた書簡を中心に、発信日順に整理したものである。ついで②K 冊は、ともに全羅道に属する群山同順泰(李静波)・全州同順泰(群枝)から譚傑生に宛てて送られた書簡を中心に、やはり発信日順に整理したものである。これら①②が主に同順泰の分号から本号宛ての書簡を中心に収録しているのに対し、③S 冊は同順泰外の取引先、

特に海外の取引先から譚傑生に当てられた書簡を中心に、発信者別に整理したものである。

最後に④N冊は、受信者こそ譚傑生が多数を占めている点で①②③と共通しているが、発信者には①②③にそれぞれ見られるような傾向性がなく、仁川同順泰からの書簡、群山同順泰からの書簡、国内外の取引先からの書簡が混在している。その中には発信者名や連番などから本来は①②③に収録された方が相応しいと思われるものもある。また発信年もばらばらで、光緒三〇〜三二年の3カ年にまたがることが確実なほか、日清戦争以前に遡るとみられる書簡さえ混入している。このことから④N冊は、一定の方針に従って編集されたと思われる①②③の4冊とは異なり、むしろそれら4冊に含まれない、あるいは誤って4冊に含まれなかった書簡をまとめて1冊としたと見るのが妥当のように思われる。

六 不明グループの検討

(1) 構成

表紙の表題に干支がないO、P、Q、Rの4冊を仮に不明グループとした。O冊には52件、P冊には55件、Q冊には44件、R冊には40冊の書簡が収録されている。表題には、O、Pの2冊にはそれぞれ「乾」「坤」の記号がありセツトとして扱われている一方、Q冊とR冊には「単」の記号が見え、独立したものとして扱われている。

O、P冊ではいずれも発信日順に書簡が配列されており、それぞれの発信日の範囲はO冊が二月十一日付〜三月十日付、P冊が三月十九日付〜五月六日付までである。2冊を通して配列が連続していることが分かる。発信年については明示されていないが、唯一P27の発信日に「己」字が見える。また発信者はいずれも「仁庄」がほとんどを占め

(O冊49件、P冊48件)、受信者についてもいずれも「漢庄」ないし「漢庄本号」がほとんどを占めている(O冊49件、P冊54件)。

Q冊も発信日順に書簡が配列されており、発信日の範囲は一月七日付～二月十七日付である。これらの日付にはまったく干支が記されておらず、年代の特定は難しい。ただし1888年から1894年にかけて仁川・上海間を運航していた招商局の「広済船」について言及している箇所があることから(Q10、Q14)、日清戦争以前のものと思われる。主要な発信者は「晴湖」ないし「晴」が20件、「廷鋭」が20件である。対して受信者は、譚傑生が24件を占めるが、他に「叔父大人」とのみあり個人名を記さない書簡が18件ある。

R冊における書簡の配列は複雑である。まず冒頭のR01(己十二月二三日付)からR13(庚二月十一日付)までは、概ね発信日順に連続しているように思われる。これらの書簡のうち「梁綸卿」発の書簡には発送に用いられた船便名が記されており⁽⁴⁾、そこから「己」は光緒十五年(1889、己丑)年、「庚」は同十六(1890、庚寅)年と比定される。ところが続くR14からR19までには、10年以上飛んだ癸卯年(光緒二九、1903年)の書簡が集中している。そしてR20以後には一定の配列の方針を見出すことが困難で、発信年の干支も乙巳(光緒三一、1905)、壬申(光緒十八、1892年)、甲午(光緒二〇、1894年)などが混在している。またR冊では発信者は多様で、最も多く発信している発信者でも39件中7件を占めるにすぎない(「梁綸卿」発)。ただし受信者については譚傑生が33件と多数を占めている。

このような構成上の特徴から、次の(2)では、O、P冊を同時に扱い、Q冊R冊についてはそれぞれ一冊ずつ扱うこととしたい。

(2) 発信者別の検討

① 0, P 冊について

(a) 「仁庄」発の書簡(97件)

先述したように 0, P 2 冊に収録された書簡 107 件のうち 97 件を占める。受信者は「漢庄」ないし「漢庄本号」である。このような受信者名の組み合わせは、N 41 を除けば己丑年グループの A, B, C 冊にしか現れていない。己丑年グループについての検討で述べたのと同じ理由から、これらは仁川同順泰分号から漢城同順泰本号に送られた書簡と見られる。

また多くの書簡の冒頭に連番と発信日付、遞送方法が記される点も、A, B, C 冊および N 41 の「仁庄」発書簡と同様である。連番は 0 冊の「仁庄」発書簡が(「不列号」と連番なしを除いて) 42 号から続 71 号まで、P 冊が 72 号から 105 号までである。この間ほとんど欠落はないが、0 冊の続 65 号(三月九日付、0 44)と 67 号(三月十一日付、0 45)の間が欠落している。ここで同じく「仁庄」を発信者とする先述の N 41 を見ると、その発信日は三月十日、連番は 66 号である。発信日・連番の双方からみて、N 41 が 0 冊中の欠落箇所になまるべきものであることは、ほぼ疑いない。

このように連番と発信日を対照することで、N 41 が 0 冊の「仁庄」発書簡と連続することが確認できるが、同様にして、A, B, C 冊と 0, P 冊の「仁庄」発書簡について比較してみよう。A, B, C 冊の「仁庄」発書簡についての第二節の検討を思い起こすと、それらは連番の上でほとんど欠落なく連続しているが、唯一、42 号(B 35、二月十三日付)と続 108 号(B 36、五月九日付)の間が大きく欠落していた。一方で 0, P 冊は、連番のない 0 01, 0 02 を除き、42 号(0 03、二月十四日付)から始まり 105 号(P 55、五月六日付)までほぼ連続している。この連番と発信日を対照すると、いずれの点でも B 35 と B 36 の間に 0, P 冊を入れてほぼ矛盾がない(ただし 42 号が重複する点に若干の疑問が残る)。このことから、0, P 冊(そして N 41)の「仁庄」発書簡は、己丑年 B 冊の「仁庄」発書簡の欠落部分にあたるものと見てよいのではないだろうか。

(b) 「何麗堂」発の書簡(8件)

0, P2冊中に8件見られる。そのうち1件には「仁川同順泰書柬」(P50)の印影があわせて見られ、この人物が仁川同順泰の店員であったことが推測される。この人物の名は、仁川駐在の清国商務委員が作成した光緒十二年(1886)年分の居留清国人名簿にも現れる⁽⁴²⁾。それによれば、この人物の本籍地(籍貫)は譚傑生と同郷の広東省高要県であった。なお先に癸卯年に仁川同順泰から発信されたものと推測した「何介眉」発I04では、書簡本文中で何麗堂を「家叔」と呼んでおり、親族関係にあった可能性がある。

②Q冊について

(a) 「晴湖」「晴」発の書簡(20件)

甲午年E, F, G冊ほかに現れた譚晴湖と同じ人物だと思われる。受信者はすべて「傑生弟」で譚傑生に当てられたものである。どこからの発信かは明記されていないが、内容には仁川での取引活動や商況の報告が多く、甲午年E, F, G冊の同じ人物発の書簡と同様、仁川同順泰からの発信と見るのが妥当だと思われる。

(b) 「廷銳」発の書簡(20件)

受信者は1件が「傑生叔父大人」(Q07)、1件が「傑生叔台」(Q17)で、残り18件は「叔父大人」とのみあり個人名を記していない。ただしQ07とQ17で譚傑生を「叔父」「叔台」と呼んでいることから、この「叔父大人」も譚傑生を指す可能性がある。発信地については明記していないが、Q14の書簡本文の中で「晴湖伯父」の行動に言及していること、逆に「晴」発のQ08でも「廷銳」に言及していることなどから、譚晴湖とこの廷銳なる人物が一緒に働いていた可能性が考えられる⁽⁴³⁾。内容も仁川での取引状況についての報告が散見され、(a)の譚晴湖発の書簡と同様、仁川同順泰からの書簡と見てよいであろう。

③ R 冊について

(a) 「梁綸卿」発の書簡(7件)

先に乙巳年 S 冊、N 冊でも現れた「梁綸卿」発の書簡が7件見られる。この7件は書簡の前半部分に集中している(R 01 から R 12 の間)。これらには S 冊、N 冊の同人発の書簡と同様、「同泰号書柬」の印影が見える。「羅柱臣」発の1件(R 04)と発信者個人名は記されていないが「上海北頭同泰号」の印影が見られる1件(R 27)がある。「梁綸卿」発の7件の書簡の受信者は「傑生賢弟」ないし「同順泰本号傑生賢弟」であり、漢城同順泰の譚傑生のもとに宛てられた書簡であるといえる。

この7件には(追伸として書かれたと思われる R 03 一件を除き)冒頭に連番が付されており、その番号が1号から6号まで欠落なく揃っていること、日付順と番号順とが矛盾しないことから、一続きの書簡だと考えてよい。年代については、先に(1)で述べたように、光緒十五(1889)年末から翌十六(1890)年二月までと考えられる。なお先の S 冊、N 冊の「梁綸卿」発書簡には600番台の連番が打たれていたが、それが本冊の「梁綸卿」発書簡の連番と連続するかは不明である。

(b) 「陳達生」発の書簡(6件)

いずれにも「祥隆号書柬」ないし「祥隆号 神戸海岸通六十五番」の印影が見える。S 冊に見られる陳達生(神戸祥隆号)と同一人物だと考えられる。受信者は6件とも「傑生仁兄大人」である。この6件の発信年代については不明だが、R 09, R 10, R 13 の3件については(a)の「梁綸卿」発書簡とともに発信日順に配列されていることから、「梁綸卿」発書簡と同じ光緒十六(1890)年二月に発信されたものと考えられる。

(c) 「玉階」「譚沛霖」「横浜福和号」発の書簡(4件)

この3者4件の書簡には共通して「横浜福和号書柬」の印が見える。同順泰の横浜における取引先華商であろう。1889年の『横浜商業会議所月報』では、横浜中華商業会議所の役員として「福和号」の「譚玉階」が現れており⁽⁴⁴⁾、同じ商号・人物とみてよいだろう。そして「玉階」発のR 30、R 33では、譚傑生に対して「宗弟」と自称しており、上の『横浜商業会議所月報』でその姓が「譚」と確認できることとあわせ、譚傑生と親族関係にあった可能性がある。なおこれらの書簡の発信年については不明だが、「譚沛霖」を発信者とするR 07については、「陳達生」発のR 09、R 10、R 13と同じ理由で、光緒十六（1890）年一月発の書簡と考えられる。

(d) 「羅耀箴」「羅煜甫」発の書簡（3件）

前者が2件、後者が1件あるが、いずれにも「元山同豊泰書柬」の印影が見られる。「羅煜甫」発の書簡は他に己丑年分に1件見られ、「羅耀箴」発の書簡は乙巳年分に5件見られる。受信者は、「羅煜甫」発の書簡では「傑生仁翁大人」、「羅耀箴」発の書簡では「傑生仁兄大人」となっている。「羅煜甫」発のR 08については、これも「陳達生」発のR 09、R 10、R 13と同じ理由で、光緒十六（1890）年一月発の書簡と考えられる。一方「羅耀箴」発のR 31には文面中に「曾欽差」の語がみられ、朝鮮出使大臣で曾姓を持つ者は1895年2月に着任した曾広銓に限られるから、R 31の発信年もこれ以後に限定される。また同じく「羅耀箴」発のR 32には「黎領事」の語があり、元山領事で黎姓を持つ者は同じく1895年2月に代理副領事となった黎子祥のみだから、R 32の発信年もこれ以後に限定される。

(e) 「李静波」発の書簡（4件）

いずれにも「群山同順泰書柬」の印影が見られる。同じ発信者からの書簡は、既に乙巳年K冊、N冊にも現れている。受信者は4件とも「傑生叔大人」である。年代は、R 16とR 18、19には「癸卯」（光緒二九、1903）と記されている一方、R 21には「乙巳」（光緒三二、1906）と記されており、年代の開きがある。R 16とR 21には書簡冒頭に連番が打たれているが、それぞれ166号と337号で、この点でも開きがある。なお同じ「李静波」発のN 50は乙巳年八月六日付

で336号の連番が打たれている。そこで乙巳年八月八日付で337号の連番を持つR 21は、発信日と連番からみて、R冊の他の「李静波」発の書簡ではなく、N冊のN 50と連続しているといつてよい。

(f) その他の発信者からの書簡

同順泰分号からの書簡と確定できるものとして、「仁庄」発(R 38)、「群枝」発(R 14とR 17、双方とも「全州同順泰書柬」印あり)、「常錯」(R 28、「全州同順泰書柬」印あり)などがある。何れも受信者は譚傑生ないし漢城同順泰である。他に「廷賡」(R 29)、「羅明階」(R 24)、劉時高(R 40)などはいずれも同順泰の店員として既出である。

(3) 小結

O, Pの2冊については表題の記号上セットとして扱われ、発信者の傾向も共通し、発信日順の配列も連続している。この2冊所収の書簡は主に仁川同順泰から漢城同順泰に宛てて送られたもので、特に「仁庄」発の書簡が大半を占めている。(2)で詳しく検討したように、このO, P冊所収の「仁庄」発書簡は、己丑年のA, B, C冊の「仁庄」発書簡の欠落を埋めるものである。そしてO, P冊では「仁庄」以外の発信者の書簡も「仁庄」発書簡と発信日付順で連続していることを考えれば、O, P冊の全体がA, B, C冊の欠落部分に対応するものではないかと考えられる。

Q冊は年代については日清戦争前というよりほか不明だが、仁川同順泰から漢城同順泰(譚傑生)宛ての書簡を発信日順に配列したものである。なお本冊の表題は、第2行目以下に干支・月日ではなく「仁川来信」の文字が見えることで異例であるが、少なくとも「仁川からの来信」という点で内容を反映していることが確認できる。

R冊は、冒頭のR 01から途中のR 13まで、上海同泰号からの書簡を中心に、同順泰外取引先から漢城同順泰(譚傑生)に宛てられた書簡を発信日順に配列する形式をとっている。しかしR 14以後はそのような方針が失われ、同順

泰内外の華商から譚傑生に宛てて送られた書簡が、年代もばらばらに配列されるようになる。なお本冊の表題の第2行目は、第1行目と同じ「同泰来信」が繰り返されておき、Q冊より一層異例である。先のQ冊で表題2行目の「仁川来信」が「仁川（分号）からの来信」と理解できるのに倣い、本冊表題2行目の「同泰来信」も「同泰からの来信」と解すると、「同泰」は同順泰の上海での取引先であった同泰号の商号名であるから、少なくとも本冊のR13までについてはこの表題と対応する構成をとっているといつてよい。

七 『同泰来信』の性格と成立過程

図表3はこれまでの検討の結果を整理したものである。この表では冊子ごとに書簡の配列方法（発信日順の場合は括弧内に上下限の日付）と受発信者構成とを示している。なお受発信者については、その所在地と属する商号名に集約して掲表している。それらが書簡上の実際の受発信者名とどう対応するかについては、表註に示した。

図表3 『同泰来信』各冊の構成

己丑	グループ		冊名	件数	配列	発信者（発信地…商号）	受信者
	A冊	B冊					
	二〇	三七			発信日順（光緒15.1.3-1.15） 発信日順（光緒15.1.17-2.13, 5.9）	仁川…同順泰（20） 仁川…同順泰（35）、上海…同泰号（1）、不明（1）	漢城…同順泰（20） 漢城…同順泰（36）、不明（1）

癸卯			甲午				C冊
			②		①		
J冊	I冊	H冊	G冊	F冊	E冊	D冊	
六五	五六	五二	三〇	六一	五九	四二	六五
発信日順（光緒29.10.9-12.28）	発信日順（光緒29.4.2-10.8）	発信日順（光緒29.1.13-3.20）	発信日順（光緒20.5.17-6.5）	発信日順（光緒20.3.12-5.15）	発信日順（光緒20.1.18-3.11）	発信日順（光緒19.12.19-20.4.16）	発信日順（光緒15.5.10-6.29）
仁川：同順泰（44）、鎮南浦：不明（1）、不明（2）	仁川：同順泰（45）、鎮南浦：不明（6）、仁川：義生盛（1）、不明（4）	仁川：同順泰（46）、鎮南浦：不明（4）、不明（2）	仁川：同順泰（28）、不明：同順泰（1）、不明（1）	仁川：同順泰（55）、仁川：怡生号（3）、不明：同順泰（1）、不明（2）	仁川：同順泰（46）、仁川：怡生号（6）、仁川：義生盛（1）、不明（6）	全州・栗浦：同順泰（33）、仁川：同順泰（3）、不明：同順泰（1）、横浜：福和号（1）、不明（5）	仁川：同順泰（64）、不明（1）
漢城：同順泰（64）、不明（1）	漢城：同順泰（56）	漢城：同順泰（50）、不明（2）	漢城：同順泰（30）	漢城：同順泰（61）	漢城：同順泰（59）	漢城：同順泰（38）、不明（5）	漢城：同順泰（65）

ソウル大学校蔵『同泰来信』の性格と成立過程(石川)

①	已 乙					
	①		②	③	④	①
0 冊	L 冊	M 冊	K 冊	S 冊	N 冊	
五二	三八	四八	三八	三五	五一	
0-3.18)	発信日順(光緒31.1.4-2.18)	発信日順(光緒31.2.11-4.7)	発信日順(光緒31.1.5-7.9)	各発信者について発信日順	不定	発信日順(光緒15.2.10-3.18)
仁川：同順泰(32)、元山：清国領事(2)、鎮南浦：不明(1)、漢城：清国総領事(1)、不明(2)	仁川：同順泰(39)、元山：清国領事(4)、不明：同順泰(1)、鎮南浦：清国領事(1)、不明(3)	群山：同順泰(29)、全州：同順泰(6)、不明(3)	上海：同泰号(15)、香港：安和泰(5)、元山：同豐泰(3)、神戸：祥隆号(3)、長崎：万昌和(2)、全州：同順泰(1)	仁川：同順泰(17)、群山：同順泰(9)、上海：同泰号(7)、不明：同順泰(5)、元山：同豐泰(3)、香港：安和泰(2)、仁川：同意楼(1)、神戸：祥隆号(1)、不明：巨昌泰(1)、不明(4)	仁川：同順泰(51)、不明(1)	漢城：同順泰(52)
漢城：同順泰(38)	漢城：同順泰(48)	漢城：同順泰(37)、不明(1)	漢城：同順泰(34)、不明(1)	漢城：同順泰(51)		

明		不	
③	②		P 冊
R 冊	Q 冊		五五
四〇	四四		発信日順（光緒15.3.1 9-5.6）
不定 ※途中（R 13） まで発信日順（光緒1 5.12.23-光緒16.2.1 11）	発信日順（? 1.7-2.1 7）	仁川：同順泰（54）、 （1）	漢城：同順泰（55）
上海：同泰号（9）、 （6）、横浜：福和号（4）、 同順泰（4）、全州：同順泰（3）、 不明：同順泰（3）、 （3）、仁川：同順泰（1）、 清国領事（1）、不明（6）	仁川：同順泰（40）、 不明（3）	漢城：同順泰（42）、 不明（2）	

（註）

- ・「グループ」は表題に記された干支と上・下、単などの記号を基準としている。
- ・「件数」は当該冊子に収録されている書簡の件数である。
- ・「配列」は収録書簡の配列方法を示す。それが発信日順である場合、括弧内に上下限の日付を示した。なお日付は陰暦。
- ・「発信者」は収録書簡の発信地と発信者の商号を示す。括弧内は件数である。発信者が多い順に配列している。
- ・「受信者」は「発信者」と同様の形で収録書簡の受信地と受信者の商号を示す、
- ・上に掲表した受発信者名は、多岐にわたる実際の受発信者名を、本文の検討に従って整理しなおしたものである。実際の受発信者名を以下に冊子ごと列記した。 coron（○）の上が掲表した受発信者名、下が実際の受発信者名で、括弧内に件数を示した。なお実際の受発信者名についても紙幅の関係から簡略化している部分がある。付表と対照されたい。

ソウル大学校蔵『同泰来信』の性格と成立過程（石川）

(発信者)

A 冊 仁川同順泰::仁庄 (20、A 05、16を含む)

B 冊 仁川同順泰::仁庄 (35、B 28を含む)。不明::B 37

C 冊 仁川同順泰::仁庄 (63) 仁川同順泰 (1)。不明::C 45

D 冊 全州栗浦同順泰::何挺生 (10) 劉時高 (10) 羅明階 (11、D 31を含む) 全州庄 (1) 全庄 (1)。不明::D 01、05、14、23、

41

E 冊 仁川同順泰::仁棧 (20) 晴湖 (7) 廷賡 (7) 譚傑生 (11) 同順泰 (1)。不明::E 02、07、10、12、23、32

F 冊 仁川同順泰::仁棧 (11) 晴湖 (15) 廷賡 (1) 廷章 (2) 李泉享 (7) 譚傑生 (19) 不明同順泰::何挺生 (1) 不明::F 32、

33

G 冊 仁川同順泰::仁棧 (5) 晴湖 (13) 廷賡 (5) 李泉享 (5)。不明同順泰::羅明階 (1)。不明::G 03

H 冊 仁川同順泰::李益卿 (40、H 16、40を含む) 譚傑生 (4) 仁川同順泰 (2)。鎮南浦不明::古達庭 (4)。不明::H 01、49

I 冊 仁川同順泰::李益卿 (42) 廷賡 (1) 何介眉 (1) 仁川同順泰 (1)。鎮南浦不明::古達庭 (6)。不明::I 19、27、35、36

J 冊 仁川同順泰::李益卿 (48) 何介眉 (10) 仁川同順泰 (5)。鎮南浦不明::古達庭 (1)。不明::J 20、26

K 冊 群山同順泰::李静波 (29、K 05を含む)。全州同順泰::群枝 (6)。不明::K 36、38

L 冊 仁川同順泰::象喬 (27) 晴湖 (5)。鎮南浦不明::古達庭 (1)。漢城清国総領事::錢(明訓) (1)。元山清国領事::黎子祥 (2)。

不明::L 24、36

M 冊 仁川同順泰::象喬 (33) 譚傑生 (4) 仁号 (2)。不明同順泰::廷賡 (1)。元山清国領事::黎子祥 (4)。鎮南浦清国領事::

唐恩桐 (1)。不明::M 03、28、47

N 冊 仁川同順泰::瑞雲 (13) 譚傑生 (3) 仁庄 (1)。群山同順泰::李静波 (8、N 44を含む) 群山同順泰 (1)。不明同順泰::

何挺生 (2) 廷賡 (1) 象喬 (1)。不明::N 20、22、27

- O 冊 仁川同順泰・仁庄 (49) 何麗堂 (2)。不明・O 32
- P 冊 仁川同順泰・仁庄 (48) 何麗堂 (6)
- Q 冊 仁川同順泰・晴湖 (20) 廷銳 (20)。仁川不明・米郭泉 (1)。不明・Q 13、22、42
- R 冊 全州同順泰・群枝 (2) 常錯 (1)。不明同順泰・廷賡 (1) 羅明階 (1) 劉時高 (1)。上海同泰号・梁編卿 (7) 同泰号 (1) 羅柱石 (1)。不明・R 15、20、22、23、25、26

(受信者)

- A 冊 漢城同順泰・漢城同順泰 (20、A 05、16を含む)
- B 冊 漢城同順泰・漢城同順泰 (36)。不明・B 37
- C 冊 漢城同順泰・漢城同順泰 (64) 譚傑生 (1)
- D 冊 漢城同順泰・譚傑生 (36、D 31を含む) 漢城同順泰 (2)。不明・D 05、14、16、23
- E 冊 漢城同順泰・譚傑生 (45) 泉享・蘭圃 (11) 漢城同順泰 (3)
- F 冊 漢城同順泰・譚傑生 (41) 泉享・蘭圃 (16) 漢城同順泰 (1) その他 (3)
- G 冊 漢城同順泰・譚傑生 (30)
- H 冊 漢城同順泰・譚傑生 (44、H 16、40を含む) 其■〔渠?〕 (4) 漢城同順泰 (1) その他 (1)
- I 冊 漢城同順泰・譚傑生 (47) 象喬 (9)
- J 冊 漢城同順泰・象喬 (60) 漢城同順泰 (4)。不明・J 20
- K 冊 漢城同順泰・譚傑生 (37)。不明・K 03
- L 冊 漢城同順泰・譚傑生 (33) 漢城同順泰 (3) 其新 (1) その他 (1)
- M 冊 漢城同順泰・譚傑生 (33) 其■〔渠?〕 (7) 秋明 (5) 漢城同順泰 (2) 其新 (1)

ソウル大学校蔵『同泰来信』の性格と成立過程 (石川)

- N 冊 漢城同順泰・譚傑生 (43) 象喬 (5) 漢城同順泰 (3)
 O 冊 漢城同順泰・漢城同順泰 (49) 譚傑生 (3)
 P 冊 漢城同順泰・漢城同順泰 (55)
 Q 冊 漢城同順泰・譚傑生 (22) 叔父大人 (20)。不明・Q 13、22
 R 冊 漢城同順泰・譚傑生 (28) 漢城同順泰 (9)。不明・R 14、36、40
 S 冊 漢城同順泰・譚傑生 (34)。不明・S 26

一冊ごとに構成の特徴を見てゆこう。まず冊子内での書簡の配列は、S, N, R 冊を除き概ね発信日順にしたがっており、発信日が編集のひとつの基準となっていることが分かる。その発信日は、具体的な年でいえば、光緒十五 (己丑, 1889) 年、光緒二〇 (甲午, 1894) 年、光緒二九 (癸卯, 1903) 年、光緒三一 (乙巳, 1904) 年の四カ年に集中している。

ついで発信者を見ると、冊子ごとに一定の傾向があり、編集のもうひとつの基準となっていることがわかる。具体的には、仁川同順泰から発信された書簡を中心とする冊子 (A, C, E, M, O, Q の 14 冊) が多く、そのほかに全羅道の同順泰 (全州・栗浦・群山) から発信された書簡を中心とする冊子 (D, K の 2 冊)、同順泰外からの書簡を中心とする冊子 (S 冊)、傾向を見出しにくい冊子 (N, R の 2 冊)、の計 4 種類がある。

最後に受信者を見ると、漢城同順泰宛ての書簡がほとんどを占めるといって、全ての冊子が共通している。

さて本表では、冊子をグループに従って配列している。このグループは、表紙表題の干支と記号を基準に分けたものである。表題によるグループと収録書簡の内容とは、次のように対応する。まず干支については、収録書簡の発信

日と概ね対応している。次に表題の記号については発信者の傾向と対応している。つまり干支を同じくするグループの中で、発信者の傾向が似通った冊子がある場合、それらをセットとして扱うための記号が付され（上・中・下、乾・坤）、他に似た傾向の冊子がなければ「単」の記号が付されるという関係である。

以上を整理すれば、『同泰来信』の各冊は、いずれも漢城同順泰が受信した書簡を材料に、その発信日と発信者とを基準として編集されたものである。そして表題は、そうした編集の方針を反映した形で付されており、このことから表題が付されたのは冊子の成立とほぼ同時と考えてよいだろう。

それでは『同泰来信』はどのような過程を経て成立したのだろうか。上述のように、各冊内ではほぼ発信日順に書簡が配列されているが、書簡を到着に従って貼り継ぎ、徐々に冊子としていったという可能性は、排除できるようなのである。たとえば先述のように、不明グループのO、Pの両冊は、発信者の傾向と発信日順とに従えば、己丑年グループのB冊の途中に入るべきものであった。書簡を受信に従って貼り継いでいったとすれば、このような形で冊子が分かれることは考えにくい。製本は後のある時点でまとめて行われ、その際に誤ってB冊から脱落した書簡が、O、P両冊としてまとめられたと見るべきである。

さらに、そのような書簡の錯綜が年を越えて起きていることから、書簡の整理が各年末等に行われ、段階的に冊子が成立していったという可能性も、ほぼ排除される。たとえば己巳年グループの④N冊を見ると、この冊子には日付と受信者から見て他の冊子に入るべき書簡が多く含まれている。その一つとして光緒十五年に仁川同順泰から発信されたN41があるが、これは本来O冊（そしてB冊）の途中に配列されるべきものであった。N冊自体が成立したのは少なくとも己巳Ⅱ光緒三年以後だから、その中に光緒十五年発のN41が含まれているということは、N冊の編集が着手された時点でO冊やB冊もまだ成立していなかった可能性が高いことを示している。おそらく光緒三年以後のある時点で、同時並行的に各冊の整理が行われ、その中で本来はO冊に入るべきN41がN冊に入り込むといっ

た混乱も生じたのであろう。

そのような整理が行われた時点を設定することは難しい。ただし先述したように冊子の成立と同時に記されたと考えられる表題が、一定の手がかりを提供してくれる。表2でみたように、これらの冊子表題には全て冒頭行に「同泰来信」という文字が現れる。これはやや不可解な表題である。というのは、「同泰」は同順泰の上海における取引先の商号名であり、これを発信者とする書簡は確かに含まれてはいるが、全体の中のごく一部に過ぎない（S 19～S 33など）。また「同泰」を同順泰の略と解することもできるが、同順泰の当事者ならば、取引先の商号として同泰号があるにも関わらず自号を「同泰」と省略するようなことは決して行わないであろう。冊子の整理者がそのような略称の意味で「同泰」と書いたならば、その者は同順泰内部の人間ではありえない。

このような表題が示唆するところにつき、表題が他冊とやや異なる形をとっている、R冊とQ冊を手がかりに考えてみよう。この2冊の表題の異例さは、他が表題2行目以下に収録書簡の発信日と対応する干支・月を記しているのに対し、この2冊では「同泰来信」（R冊）「仁川来信」（Q冊）という文字を記している点にある。特にR冊において、表題1行目と2行目に重ねて「同泰来信」と記されているのはいかにも異様である。

このR冊については、第六節の小結で次のように述べた。つまりR冊の前半部分は、上海同泰号発の書簡が中心で、それらは発信日順に整列されている。発信年は光緒十五年末から十六年初にかけてである。この前半部については「同泰より来る信」という意味で表題に一致している。ただしR冊後半部では、発信日・発信者の何れについても原則が見られない。またQ冊については、全体が仁川同順泰発の書簡であり、それらは発信日順に整理されている。発信年は不明だが日清戦争以前であることは間違いない。このようなQ冊の内容も、「仁川より来る信」という意味で表題に一致している。

このことから筆者は、『同泰来信』の成立過程について、先ほど述べたところを若干補正しつつ、次のような仮説を

提起したい。①同順泰関係者の手によってR冊前半部とQ冊が製本され、その表題には「某より来たる信」という意味で『同泰来信』『仁川来信』と記された（すなわち現表題の第2行目）。②この2冊と、他はまだ製本されていない書簡が同順泰外の第三者の手にわたり、そこで未製本の書簡についても、R冊前半部とQ冊に倣って発信者・発信日を基準とした整理が行われ、製本された⁴⁵。なおR冊後半部には、その整理過程で他の冊子に収録されなかった雑多な書簡がまとめて添付された。③この第三者が表題を記入する際に、R冊表題の「同泰来信」を（本来の意図とは違って）「同順泰に関する来信」と理解し、そのまま全冊の表題とした。その際、すでに製本されていたR冊とQ冊についても、改めて第1行目に「同泰来信」という表題を付け加えた⁴⁶。やや入り組みすぎており、修正の必要もあるように思うが、とりあえず現在のところでは上のように理解しておきたい。この第三者が誰かという点については、後の検討にゆだねるよりほかないが、これらが奎章閣に収蔵される過程を検討することで、あるいは明らかになるかもしれない⁴⁷。

八 まとめにかえて

本稿では、『同泰来信』の史料群としての性格に注目して検討してきた。その意味での結論は前節に尽きている。ただ、このような検討の過程で、同順泰の店舗網や取引先網の広がり、それらを通じた情報収集のあり方、店員の構成など、同順泰の経営形態そのものについても多くを知ることができた。それらについて詳しくは稿を改めて論じることとしたいが、ここで知りえた事実の主要のみ振り返っておきたい。

『同泰来信』収録書簡で最も多数を占めるのは、同順泰分号から本号に宛てて発信された書簡である。このことから、同順泰が漢城に本号を置くほか、朝鮮内の数ヶ所に商号名を同じくする分号を設置していたことが確認できる。己丑

年グループの書簡が発信された光緒十五（1889）年ごろには、少なくとも仁川分号は成立していたことが分かり、以後各グループで仁川分号からの書簡が見える。他には甲午年グループに朝鮮西南部に位置する全羅道の栗浦分号・全州分号からの書簡が見え、乙巳年グループには同じく全羅道の全州分号・群山分号からの書簡が見える⁽⁴⁸⁾。

仁川分号の書簡から見てみよう。まず光緒十五（1889）年の仁川分号発の書簡は、先述のように3ヶ所に分散しているものを合わせれば、同年一月上旬から六月下旬までちょうど半年間の書簡が残存している。その数は225件に上り、平均して一日に通以上の書簡が発信されていたことが分かる⁽⁴⁹⁾。以後、光緒二〇（1894）年、光緒二九（1903）年、光緒三一（1904）年と、書簡が集中して残っている年については全て仁川分号からの書簡が最も多く、その頻度も二〇年と三一年は1〜2日に1回のペースを保ち、二九年はやや下がるがそれでも3〜4日に1回である。仁川はこの時期の朝鮮で最も重要な対清国貿易港であったから、同順泰がこの地に分号を置いて連日のように連絡を取り合っていたことは、その活動の軸足を対清国貿易に置いていたことをよく示している。

一方、光緒二〇（1894）年以後に発信者として現れるようになる、全州・栗浦・群山の分号は、先述のように朝鮮南西部の全羅道に位置している。このうち群山が開港されるのは日清戦争後の1895年で、全州や栗浦は一貫して非開港場であった⁽⁵⁰⁾。この全羅道は朝鮮最大の米作地帯であり、これら分号の書簡の内容から、同順泰が同地で米を買い付けて仁川に回送していたことが分かる。書簡自体もしばしばこれら米の運送船に託して、仁川経由で漢城に送られていたようである⁽⁵¹⁾。これらの分号からの書簡は、仁川からの書簡に比べれば頻度は落ちるものの、ある程度まとまってそれらの書簡が残っているD冊・K冊を見ると、1週間に1度程度は発信されていたようである。

なお、仁川分号からの発信者として現れる〔譚〕晴湖（甲午年E〜G冊）、譚象喬（乙巳年L、M冊）などは、漢城本号における受信者である譚傑生への呼称から、その親族であったことが推測できる。またどこからの発信か必ずしも明確ではないが、〔譚〕以莊（C45, E23）〔譚〕秀枝（S18）など、やはり親族であったと思われる人物も発信者

として現れている。同順泰の経営組織が、譚傑生個人の親族関係と重なりを持っていたことが分かる。

このように分号からの書簡を通じて、同順泰が1880年代から仁川に分号を置いて清国貿易に重点をおいた活動を行っていたこと、さらに遅くとも1880年代前半からは南西部の非開港場にも店舗を置いて国内流通への参入を図っていたことなどが確認できる。

さて同順泰内の分号からの書簡に比べ、同順泰外からの書簡は数が少ない。とはいえ書簡の発信者は、仁川・元山など朝鮮国内の開港場だけではなく、上海・香港・神戸・横浜・長崎など、日清両国の主要開港場にまたがって分布しており多彩である。なかでも上海の同泰号（梁綸卿）からの書簡は、光緒三十一年六月に発信されたS 33に「633号」の連番が振られており、連番の起点がいつかは不明ながら、かなり頻繁かつ長期にわたって書簡の往来を行っていたものと推測できる。また梁綸卿は、その譚傑生・譚象喬に対する呼称から、彼らと姻戚関係にあったことが推測できる（第五節（2））。

その他、仁川の怡生号（陳如三、E 13など）・義生盛（周夢龍、E 25など）、元山の同豊泰（羅耀箴、S 12など）、神戸の祥隆号（陳達生、S 02など）、万昌和（潘達初、S 05など）などの発信者は、各種の資料から譚傑生と同郷の広東省（珠江デルタ地方）出身であることが判明する。これらから、同順泰の取引網が、譚傑生個人の親族関係や同郷関係の広がりとなり重なりあっていたことが確認できる。この点は、先にみた同順泰内の店員と譚傑生との関係とあわせ、同順泰の経営上の特徴をなすものとして、注意しておいてよいだろう。

これらの特徴は、いずれも書簡の受発信者やその頻度などから見て取れたものにすぎない。書簡の内容や、今回は取り上げられなかった他の同順泰経営資料の内容などから、順次検討を深めてゆく予定である。

註

ソウル大学校蔵『同泰来信』の性格と成立過程（石川）

- (1) 従来の研究では、日清戦争以前における朝鮮華商の活動について、清国の対朝鮮積極政策を反映したものと捉えることが多かった。それらの研究では、視点の中心は朝清両国の外交政策や、華商の圧力と対峙する朝鮮人商人の活動に置かれることが多く、華商の活動そのものに即した分析はほとんど行われてこなかったといえる。ただし近年の古田和子氏による研究では、朝鮮華商が東アジアに構築していた流通ネットワークそのものに視点を据えており注目されるが、その手法は貿易統計と日本領事の観察記録を主に利用するものであり、個別華商レベルの経営形態については、実証的な検討を加えていない。こうした研究動向については次の拙稿の「はじめに」で述べた。石川亮太「開港後朝鮮における華商の貿易活動―1894年の清国米中継貿易を通じて―『中国近代化の動態構造』森時彦編、京都大学人文科学研究所、2004年。
- (2) 奎章閣は1776年昌徳宮内に設置された文庫に起源を持つ。その蔵書は、1910年の韓国併合後、各衙門の行政文書とあわせて朝鮮総督府の所蔵に帰し、さらに京城帝国大学を経てソウル大学に移管された。本稿で扱う同順泰経営資料がこの奎章閣で所蔵されるに至った経緯については明らかでない。しかし各冊に捺されている蔵書印を見ると、「京城帝國大學圖書」「서울(ソウル)大學校圖書」の二種類のみが見られ、1938年以前の収書に見られるべき「朝鮮總督府圖書」の印影が見られない。このことから、これらの資料は、奎章閣の蔵書が京城帝国大学の管理下にあった1938年から59年の間に収蔵されたものであると考えられる。
- (3) なお奎章閣には、図表1に挙げた以外の同順泰関係の資料として、本文中で後述する朝鮮政府借款に関する「同順泰第貳借銀按償取拠」(奎26383)、「同順泰号借款合同」(奎26383)が所蔵されている。しかしこれらは朝鮮政府側の作成・保存にかかる資料であるため、同順泰経営資料には含めないのが適当だと考える。
- (4) たとえば、朴銀瓊『韓國華僑의 種族性』ソウル：韓国研究院、1986年、54頁では、おそらく「乙未來貨置本單」(奎27782)の一部と思われる資料の写真を掲げている。しかしその内容については、「同順泰の物品購入帳簿」と紹介するのみで、史料として分析・利用している訳ではない。
- (5) 서울大奎章閣『奎章閣韓國本圖書解題統集』史部4、ソウル：民昌文化社、1997年。具体的には「甲午年各準來貨置本單」

(336頁)「同泰来信」(337～338頁)「乙未來貨置本」(339頁)「進口各貨艙口單」(344頁)の順で解題が付されている(執筆担当者は金廷美氏)。これらの解題では、同順泰を「清国上海の代表的貿易商」とするなど(336頁)誤りが目立ち、遺憾ながら信頼にたえるものではない。

(6) 石川亮太「日清戦争以前における在朝華商の貿易活動」『近代朝鮮をめぐる国際流通の形成過程―アジア域内市場の中の朝鮮植民地化』第3章、大阪大学文学研究科博士学位論文、未公刊、2003年・全「開港後朝鮮における華商の貿易活動」(註1前掲)。

(7) 本稿の考察は、2001年夏に所蔵機関(ソウル大学校奎章閣)で行った史料調査を基礎としている。調査にあたっては、まず一般公開されているマイクロフィルムを閲覧・複写し、マイクロフィルムで判別できない箇所については許可を得て原本と対照した。短時間での調査であり、原本照合も必ずしも完全ではない。今後の補正を期したい。

(8) 林明德『袁世凱与朝鮮』台北：中央研究院近代史研究所、1970年、212～216頁；金正起「朝鮮政府의 清借款導入(1882-1894)」『韓国史論』3号、ソウル大学校国史学科、1976年、468～478頁；楊昭全・孫玉梅『朝鮮華僑史』北京：中国華僑出版公司、1991年、157～162頁；羅愛子『韓国近代海運業史研究』ソウル：国学資料院、1998年、131～133頁。

(9) 以下本節の同順泰・譚傑生の経歴については、石川亮太「開港後朝鮮における華商の貿易活動」(註1前掲)の「I」を再構成したものである。事項の詳細な出典等についてはこの前稿を参照されたい。

(10) 李鴻章發総理衙門宛、光緒十二年二月二十七日(1886.4.1)、『清季中日韓関係史料』第4巻、台北：中央研究院、1972年、2052頁(文書番号1127、附属文書2)。これは当時朝鮮の漢城と開港場に駐在していた清国商務委員の作成した居留清国人の名簿で、光緒十一年(1885)年分にあたる。これを含めて『清季中日韓関係史料』では、光緒九年～十二年分の在留清国人名簿が収録されている。その性格は近稿にて論じる予定である。

(11) ただし本史料のように書簡を横に貼付繋げた形態では、書簡各件の終始を明確にするのは必ずしも容易ではない。今回はひとまず、本文中に後述するような定型(「某某先生台鑑」)、「敬請台安、弟某某頓首、某月某日」に従って書簡の終始を区別したが、このような定型をとらない書簡もあるし、定型を踏んでも(追伸部分に過ぎないなどの理由で)独立した書簡とは言い

がたい場合もある。そうした問題から、ここに掲げた件数は必ずしも正確なものではなく、今後の補正を期したい。

- (12) うち A 05, A 16, B 28 は発信者が明示されていないが、「仁庄」発と推測してここに含めた。詳しくは付表 A, B の「その他」欄を参照。

- (13) なお甲午年の E 23 も「以莊」を発信者としている。その受信者は「傑生三大人」で、やはり「三」字が含まれているのが注意される。

- (14) 『清季中日韓関係史料』4 卷、2206 頁（文書番号 1208、附属文書 1）。この名簿については註 10 を参照。

- (15) ただし発信者名が明記されていない D 31 を含む。理由は付表 D の該当欄を参照。

- (16) なお後述の劉時高を発信者とする書簡によれば、何挺生は二月二十九日ごろ全州を出発し、忠清道群山を経て海路仁川に戻ったようである（D 28, D 32）。このことは、何挺生を発信者とする書簡が二月までに集中するのと符合している。

- (17) 大東輿地図にあらわれる（1894 年、草風館版、十七・12）。

- (18) 残り 2 件のうち D 42 の受信者は「本帳房先生」である。その内容は、送付した貨物送り状（「置本単」）の誤記を訂正して欲しいというものであり、「本帳房先生」は漢城本号の会計・帳簿担当者意味するものである。もう 1 件 D 31 は受発信者名とも明記されていないが、D 30（羅明階発・譚傑生宛）の追伸部分と考えられ、独立した書簡ではない。

- (19) なおこの「三弟」の呼称は、先に見た己丑年 C 45 で発信者の「以莊」が受信者の譚傑生を「三兄」と呼んでいるのとも対応している。

- (20) 註 14 に同じ。

- (21) 「泉享仁兄」については後註 22 を参照。「蘭圃仁兄」については、三月二五日付 F 32 の発信者として「邵蘭圃」なる人物が現れており、同一人物の可能性がある。またこの「邵蘭圃」は、本文中にも既に述べたように、同じ甲午年の D 41 にも発信者として現れる。

(22) 先述の譚傑生発の書簡では、受信者として「泉享仁兄」なる人物が現れており、この「李泉享」と同一人物である可能性がある。「李泉享」発の書簡は、1例（三月二十六日付F 34）を除きすべて五月十一日付（F 51）以後である。対して「泉享仁兄」が受信者となっている譚傑生発の書簡はすべて四月三〇日（F 46）以前である。ここから、四月末まで漢城本号にいた李泉享が五月から仁川分号に移ったものと考えれば、矛盾はない。

(23) 光緒十二年分については註14に同じ。光緒十年分については『清季中日韓關係史料』4巻、1796頁（文書番号983、附属文書9）

(24) 註14に同じ。

(25) 「仁棧」「廷廣」「晴湖」「李泉享」「廷章」発の計98件である。これに譚傑生が仁川同順泰に出張して発信したと考えられる30件をあわせれば、全体の85%にあたる128件が仁川同順泰からの発信ということになる。また②では、同順泰以外の商店から発信された書簡と確認できる10件（「陳如三」「周夢龍」発）も、全て仁川からの発信であった。

(26) H 16, H 40は受発信者が明記されていないが、それぞれ李益卿発・譚傑生宛書簡（H 15, H 39）の追伸部分と思われる、ここに含まれた。

(27) やや時期が遡るが、1895年7月の袁世凱から朝鮮政府への書簡によれば、前年十月（陰）以降に発行した内地旅行許可書（護照）の受給者の一人として「李益卿、往忠清全羅道、同順泰保」という名が現れている（袁世凱發閱種默宛書簡，光緒十八年七月六日（1892.7.6），『旧韓国外交文書』9巻（清案2）、112頁）。癸卯年グループの「李益卿」と同一人である可能性がある。

(28) 後に見るように乙巳（1905）年分のL, M冊ではこの譚象喬が発信者として現れるが、その際に受信者の譚傑生を「三叔大人」と呼びかけている。このことから譚象喬が譚傑生の親族であった可能性が高いと判断できる。

(29) ただしうち1件には印影に重ねて「仁同順泰」と書かれている。

(30) うちK 05は発信者名が破損しているが書式の類似から李静波発書簡と判断した。

(31) なお同じ発信者からの書簡は己丑年のB 29にも既に現れている。

ソウル大学校蔵『同泰来信』の性格と成立過程（石川）

- (32) 石川亮太「開港後朝鮮における華商の貿易活動」(前掲註1) 10頁参照。
- (33) 連番の起点については不明だが、この年の一月から二月十九日までには六百通以上が発信されたと考えるのは不自然で、少なくとも毎年初ではないものと思われる。
- (34) 「香港ニ於ケル海產物取引ニ關スル規約並慣例」『通商報告』2830号、1892年。
- (35) 石川亮太「開港後朝鮮における華商の貿易活動」(前掲註1) 10～11頁参照。
- (36) 内田直作『日本華僑社会の研究』同文館、1929年、152頁より重引。
- (37) なお同じ印影は、己丑年P27の「羅煜甫」発書簡にも見える。
- (38) 『清季中日韓關係史料』4巻、2233頁(文書番号1208、附属文書6)
- (39) 発信者名が明記されているのは7件だが、発信者名部分が破損しているN51も後述の連番から同じ発信者によるものと考えられ、この1件をあわせると8件になる。
- (40) 小風秀雅『帝國主義下の日本海運』山川出版社、1995年、233頁。
- (41) 書簡に現れている広済号は清国招商局の所有船である。本文中に述べたように、招商局が広済号を用いて上海・仁川航路を運航していたのは1888年から1894年の間であり、この期間の中で己年と庚年はそれぞれ一つに決定される。
- (42) 註14に同じ。
- (43) なおQ14では「以莊叔」が「仁棧」の手伝いに当たっていることが触れられている。甲午年書簡のC65で仁川同順泰からの発信者として現れた「譚」以莊」と同一人物の可能性がある。
- (44) 『横浜商業會議所月報』28号、1899年。
- (45) 前第3者の手に渡る前に同順泰において一定の発信者別・発信年別の整理が行われていた可能性は排除できないが、本文中で述べたN41のような錯綜が生じる余地があった点から考えれば、製本まではされていないかと思われる。

(46) 筆者は冊子の物理的な特徴について検証する術を持たないが、冊子実物を見た印象のみを記せば、Q冊R冊の表紙に使用されている紙は、他の冊子のそれとはやや紙質が異なっているようである。また表題の文字は、Q冊R冊以外の全冊はほぼ同筆のようであり、Q冊R冊についても第1行目は他の冊子の表題と同筆である。ただし問題となっている第2行目のみは、別筆のように思われる。

(47) 前註2参照。

(48) このほかには直接に分号からの書簡と確認できるものはないが、癸卯年の「古達庭」発の書簡によれば、同順泰は平安道の鎮南浦に土地の権利を持っていたようである。また本文中では触れなかったが、同じく癸卯年のI 35, 36によれば、全羅道南部の本浦にも家屋を所有していたようである。

(49) なお書簡文面には、受信者側によって受信日・返信日などが記されていることがある。それによれば、漢城側からも連番付きの返信がなされており、その番号は、(六月二十九日付C 65に対する返信である) 137号にまで達している。同期間の仁川同順泰からの発信は連番で150号までだから(ただし本文中で述べたように1日1回以上発信された場合は同じ番号が用いられ、続某号として区別される)、仁川からとおおむね同等のペースで、漢城同順泰からも書簡が送られていたということができさるだろう。

(50) 非開港場に居住して活動することは、華僑の活動の根拠であった朝清間の貿易章程によれば違法であるが、実態としては必ずしも珍しいことではなかった。この点については、しばしば従来の研究でも取り上げられてきたが、一例を挙げれば、羅愛子「개항후 외국상인의 침투와 조선상인의 대응」韓國歴史研究会編『1884년 농민전쟁연구1』ソウル・歴史批評社、1991年。

(51) たとえば光緒二〇(1894)年の何梃生発の書簡では、「付元幫米金万善船帶呈」(D 06)「寄浦付米船転上」(D 27)などと書簡の發送方法を記している。なおD 06の「元幫」とは米の出荷番号(元幫であればこの年最初の出荷)を示している。

付表『同泰来信』所収書簡一覧

凡例・発信者名に「弟」「侄」等の自称が付されている場合は省略した。

・受信者名に「仁兄大人」等の尊称が付されている場合はそのまま収録した。

・受信者名が連名になっている場合はそのまま収録した。ただし受信者名とは別の箇所に「同事先生均照」などの形で第2の受信者が記されている場合があるが、それらは省略した。第2の受信者についての情報が重要だと考えられる場合は「その他」の列に記した。

・発信日は書簡上の記載どおりに(つまり陰暦で)記した。月日以外に干支が付されている場合はあわせてそれも記した。

・発信者において書簡に通し番号を振っている場合「連番」の列に記した。

・受発信者名について印影が見られる場合は四角括弧〔 〕に入れて示した。

・不明字は■で示した。・(破損)とした箇所にはマイクロフィルム上の不鮮明箇所も含まれる(原本対照未完了のため)。

A冊 (表題「同泰来信 上 / 己丑元月」)

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
A01	仁庄	漢庄本号	己丑1月3日	1号	
A02	仁庄	漢庄本号	1月4日	2号	
A03	仁庄	漢庄本号	1月6日	続2号	
A04	仁庄	漢庄			A03追伸か
A05					A03追伸か
A06	仁庄	漢庄本号	1月7日	3号	
A07	仁庄	漢庄本号	1月8日	4号	
A08	仁庄	漢庄本号	1月8日	5号	
A09	仁庄	漢庄本号	1月9日	6号	
A10	仁庄	漢庄本号	1月9日		A09追伸か
A11	仁庄	漢庄本号	1月9日		A09追伸か
A12	仁庄	漢庄本号	1月10日	7号	
A13	仁庄	漢庄本号	1月11日	8号	
A14	仁庄	漢庄本号	1月12日	9号	
A15	仁庄	漢庄本号	1月12日	続9号	
A16	(破損)	(破損)	1月13日	10号	仁庄発・漢庄宛か(書式より)
A17	仁庄	漢庄	〔月欠〕16日	不列号	
A18	仁庄	漢庄本号	1月14日	11号	
A19	仁庄	漢庄本号	1月15日	12号	
A20	仁庄	漢庄本号	1月15日	13号	

B冊 (表題「同泰来信 中 / 己丑元月 / 至二月」)

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
B01	仁庄	漢庄本号	1月17日	14号	
B02	仁庄	漢庄本号	1月19日	15号	
B03	仁庄	漢庄列位先生	2月6日	不列号	
B04	仁庄	漢庄本号	1月20日	16号	
B05	仁庄	漢庄本号	1月21日	17号	
B06	仁庄	漢庄本号	1月22日	18号	
B07	仁庄	漢庄本号	1月25日	19号	
B08	仁庄	漢庄本号	1月25日	20号	
B09	仁庄	漢庄本号	1月26日	21号	
B10	仁庄	漢庄本号	1月26日	22号	
B11	仁庄	漢庄本号	1月27日	23号	
B12	仁庄	漢庄本号	1月28日	24号	
B13	仁庄	漢庄本号	1月29日	25号	
B14	仁庄	漢庄本号	1月29日	26号	
B15	仁庄	漢庄本号	1月29日	27号	
B16	仁庄	漢庄本号	1月30日	28号	
B17	仁庄	漢庄本号	1月30日	29号	
B18	仁庄	漢庄本号	2月1日	30号	
B19	仁庄	漢庄列位先生	2月1日	不列号	
B20	仁庄	漢庄本号	2月2日	31号	
B21	仁庄	漢庄本号	2月2日		B20追伸か
B22	仁庄	漢庄本号	2月4日	32号	
B23	仁庄	漢庄本号	2月4日	続32号	
B24	仁庄	漢庄本号	2月5日	33号	
B25	仁庄	漢庄本号	2月10日	39号	
B26	仁庄	漢庄本号	(破損)	(破損)	

B27	仁庄	漢庄本号	2月7日	34号	
B28	(破損)	(破損)	2月7日	35号	仁庄発・漢庄宛(書式より)
B29	梁倫卿	同順泰本号	2月7日		
B30	仁庄	漢庄本号	2月8日	36号	
B31	仁庄	漢庄本号	2月8日	37号	
B32	仁庄	漢庄本号	2月10日	38号	
B33	仁庄	漢庄本号	2月11日	40号	
B34	仁庄	漢庄本号	2月11日	41号	
B35	仁庄	漢庄本号	2月13日	42号	
B36	仁庄	漢庄本号	5月9日	続108号	
B37					日付・受発信者等の情報なし

C冊 (表題「同泰来信 下／己丑五月／至六月」)

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
C01	仁庄	漢庄本号	5月10日	109号	
C02	仁庄	漢庄本号	5月12日	110号	
C03	仁庄	漢庄本号	5月13日	111号	
C04	仁庄	漢庄本号	5月9日	108号	
C05	仁庄	漢庄本号	5月15日	112号	
C06	仁庄	漢庄本号	5月16日	113号	
C07	仁庄	漢庄本号	5月17日	114号	
C08	仁庄	漢庄本号	5月17日	続114号	
C09	仁庄	漢庄本号	5月19日	115号	
C10	仁庄	漢庄本号	5月20日	116号	
C11	仁庄	漢庄本号	5月22日	続117号	
C12	仁庄	漢庄本号	5月22日	117号	
C13	仁庄	漢庄本号	5月22日	又続117号	
C14	仁庄	漢庄本号			
C15	仁庄	漢庄本号	5月24日	118号	
C16	仁庄	漢庄本号	5月26日	119号	
C17	仁庄	漢庄本号	5月27日	120号	
C18	仁庄	漢庄本号	5月28日	121号	
C19	仁庄	漢庄本号	5月29日	122号	
C20	仁庄	漢庄本号	5月29日	続122号	
C21	仁庄	漢庄本号	6月1日	123号	
C22	仁庄	漢庄本号	6月1日	続123号	
C23	仁庄	漢庄本号	6月2日	124号	
C24	仁庄	漢庄本号	6月3日	125号	
C25	仁庄	漢庄本号	6月3日	続125号	
C26	仁庄	漢庄本号	6月4日	126号	
C27	仁庄	漢庄本号	6月5日	127号	
C28	仁庄	漢庄本号	6月5日	続127号	
C29	仁庄	漢庄本号	6月5日	続127号	
C30	仁庄	漢庄本号	6月5日	128号	
C31	仁庄	漢庄本号	6月6日	129号	
C32	仁庄	漢庄本号	6月6日	続129号	
C33	仁庄	漢庄本号	6月6日	130号	
C34	仁庄	漢庄本号	6月7日	131号	
C35	仁庄	漢庄本号	6月8日		
C36	仁庄	漢庄本号	6月9日	132号	
C37	仁庄	漢庄本号	6月11日	133号	
C38	仁庄	漢庄本号	6月12日	134号	
C39	仁庄	漢庄本号	6月12日	続135号	
C40	仁庄	漢庄本号	6月13日	136号	
C41	仁庄	漢庄本号	6月13日	137号	
C42	仁庄	漢庄本号	6月13日	続137号	
C43	仁庄	漢庄本号	6月14日	138号	
C44	仁庄	漢庄本号	6月15日	139号	
C45	以莊	傑生三兄	[月欠]17日		
C46	仁庄	漢庄本号	6月16日		
C47	仁庄	漢庄本号	6月16日	140号	
C48	仁庄	漢庄本号	6月12日	135号	

C49	仁庄	漢庄本号	6月16日	続140号	
C50	仁庄	漢庄本号	6月18日		
C51	仁庄	漢庄本号	6月18日	141号	
C52	仁庄	漢庄本号	6月18日	続141号	
C53	仁庄	漢庄本号	6月20日	142号	
C54	[仁川同順泰書束]	漢庄本号列位先生	6月20日	不列号	
C55	仁庄	漢庄本号	6月21日	143号	
C56	仁庄	漢庄本号	6月22日	144号	
C57	仁庄	漢庄本号	6月12日	続134号	
C58	仁庄	漢庄本号	6月23日	145号	
C59	仁庄	漢庄本号	6月24日	146号	
C60	仁庄	漢庄本号	6月25日	147号	
C61	仁庄	漢庄本号	6月26日	148号	
C62	仁庄	漢庄本号	6月28日	149号	
C63	仁庄	漢庄本号	6月29日	続150号	
C64	仁庄	漢庄本号	6月29日	続150号	
C65	仁庄	漢庄本号	6月29日	150号	

D冊 (表題「同泰来信 単／甲午元月／至四月」)

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
D01	梁■	傑生仁兄大人	1月27日		
D02	玉階[横浜福和号書束]	傑生宗兄大人	12月19日		
D03	劉時高	傑生仁兄大人	癸巳12月22日		
D04	[羅明階書束]	傑生仁兄大人	12月25日		
D05	(破損)	(破損)	(破損)		フィルム上で判読困難
D06	何挺生[同順泰書束]	傑生仁兄大人	甲午1月4日	1号	
D07	劉時高	傑生仁兄大人	甲午1月6日		
D08	何挺生[同順泰書束]	傑生仁兄大人	甲1月7日		
D09	何挺生[同順泰書束]	傑生仁兄大人	甲1月15日	2号	
D10	全庄[同順泰書束]	同順泰本号	甲1月15日	1号	「辦貨單」
D11	仁棧 廷彰	傑生叔台大人	甲1月12日		
D12	仁棧	傑生叔台大人	1月14日		
D13	仁棧	傑生叔台大人	1月16日		
D14	(破損)	(破損)	(破損)		フィルム上で判読困難
D15	何挺生[同順泰書束]		甲1月17日		
D16	全州庄[同順泰書束]		甲1月18日		
D17	■ [同順泰書束]	傑生仁兄大人	甲午1月18日		
D18	羅明階[羅明階書束]	傑生仁兄大人	甲午1月19日		
D19	劉時高	傑生仁兄大人	甲午1月20日		
D20	劉時高	傑生仁兄大人	甲午1月24日		
D21	何挺生 全州[同順泰書束]	傑生仁兄大人	甲1月27日	3号	
D22	何挺生[同順泰書束]	傑生仁兄大人	甲2月6日	5号	
D23					宛先等の記載なし
D24	何挺生[同順泰書束]	傑生仁兄大人	甲2月21日	6号	
D25	何挺生[同順泰書束]	傑生仁兄大人	甲2月25日	7号	
D26	羅明階[羅明階書束]	傑生仁兄大人	甲2月29日		
D27	何挺生[同順泰書束]	傑生仁兄大人	甲2月3日	4号	
D28	何挺生[同順泰書束]	傑生仁兄大人	甲午2月30日		
D29	明階[羅明階書束]	傑生仁兄大人	甲3月15日		
D30	[羅明階書束]	傑生仁兄大人	3月17日		
D31					D30の追伸か
D32	劉時高	傑生仁兄大人	甲午2月24日		
D33	劉時高	傑生仁兄大人	甲午2月7日		
D34	[羅明階書束]	傑生仁兄大人	4月1日		
D35	[羅明階書束]	傑生仁兄大人	4月2日		
D36	[羅明階書束]	傑生仁兄大人	4月8日		
D37	劉時高	傑生仁兄大人	甲午3月27日	4号	
D38	劉時高	傑生仁兄大人	甲午3月10日		
D39	劉時高	傑生仁兄大人	甲午3月18日		
D40	[羅明階書束]	傑生仁兄大人	3月23日		
D41	卻蘭圃	傑生仁兄	甲4月7日		
D42	[羅明階書束]	本 帳房先生	3月23日		

D43	劉時高	傑生仁兄大人	甲午4月12日	5号
-----	-----	--------	---------	----

E冊 (表題「同泰來信 上／甲午元月／至三月」)

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
E01	仁棧	傑生叔台大人	1月19日		
E02	(破損)	傑生叔台大人	(破損)		
E03	晴湖	傑生三弟	1月21日		
E04	廷磨	傑生叔台大人	1月21日		
E05	陳如三 [仁川怡生号書柬]	傑生仁翁大人	甲1月23日		
E06	仁棧 廷彰	傑生叔台大人	1月28日		
E07	蔡炳蘇	傑生叔台大人	1月18日		上海より発信(内容より)
E08	仁棧 廷磨	傑生叔台大人	1月29日		
E09	仁棧	傑生叔台大人	2月1日		
E10	(破損)	傑生仁兄大人	(破損)		
E11	仁棧	傑生叔台大人	2月3日		
E12	周義	傑生仁翁大人	(破損)		
E13	陳如三 [仁川怡生号書柬]	傑生仁翁大人	2月3日		
E14	[同順泰書柬]	傑生叔台大人	(破損)		仁川同順泰発か(内容より)
E15	仁棧 [同順泰書柬]	漢本号	2月4日		
E16	仁棧	傑生叔台大人	2月6日		
E17	陳如三 [仁川怡生号書柬]	傑生仁翁大人	2月7日		
E18	仁棧	傑生叔台大人	2月7日		
E19	仁棧	傑生叔台大人	2月8日		
E20	仁棧	傑生叔台大人	2月8日		
E21	廷磨	傑生叔台大人	2月9日		
E22	廷磨	傑生叔台大人	2月10日		
E23	以莊	傑生三大人			
E24	陳如三 [仁川怡生号書柬]	傑生仁翁大人	(破損)		
E25	周夢龍 [仁川義生盛書柬]	傑生仁翁卿大人	甲2月9日		
E26	陳如三 [仁川怡生号書柬]	傑生仁翁大人	2月11日		
E27	廷磨	傑生叔台大人	2月13日		
E28	晴湖	傑生三弟	2月13日		
E29	廷磨	傑生叔台大人	2月14日		
E30	晴湖	傑生三弟	2月14日		
E31	仁棧	傑生叔台大人	2月15日		
E32	(破損)	傑生叔台大人	(破損)		
E33	廷磨	本号	2月18日		
E34	仁棧 [同順泰書柬]	傑生叔台大人	2月20日		
E35	陳如三 [仁川怡生号書柬]	傑生仁翁大人	(破損)		
E36	廷磨	傑生叔台大人	2月21日		
E37	仁棧	傑生叔台大人	2月21日		
E38	仁棧	傑生叔台大人	2月22日		
E39	仁棧 廷磨	傑生叔台大人	2月22日		
E40	譚傑生	泉亨仁兄	2月25日		「蘭圃仁兄均照」
E41	譚傑生	泉亨仁兄	2月27日		「蘭圃仁兄均鑑」
E42	傑	泉亨仁兄	2月28日		
E43	譚傑生	蘭圃泉亨仁兄	2月28日		
E44	譚傑生	泉亨仁兄	2月29日		
E45	傑	泉亨仁兄	2月30日		
E46	譚傑生	蘭圃泉亨仁兄	2月30日		
E47	譚傑生	泉亨仁兄	2月30日		「蘭圃仁兄均照」
E48	譚傑生	泉亨仁兄	3月2日		
E49	譚傑生	泉亨仁兄	3月2日		「蘭圃仁兄均鑑」
E50	譚傑生	泉亨仁兄	3月2日		「蘭圃仁兄均鑑」
E51	仁棧	傑生叔台大人	3月5日		
E52	仁棧 同順泰	漢同順泰	3月4日		
E53	仁棧	傑生叔台大人	3月6日		
E54	晴湖	傑生三弟	3月6日		
E55	晴湖	傑生三弟	3月9日		
E56	仁棧	傑生叔台大人	3月9日		
E57	晴湖	傑生三弟	3月11日		
E58	晴湖	傑生三弟	3月11日		

F59	仁棧	傑生叔台大人	3月11日	
-----	----	--------	-------	--

F冊 (表題「同泰來信 中／甲午三月／至五月」)

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
F01	仁棧	傑生叔台大人	3月12日		
F02	傑	泉享仁兄	3月15日		「蘭圃仁兄均鑑」
F03	傑	泉享仁兄	3月16日		「蘭圃仁兄均鑑」
F04	譚傑生	泉享仁兄	3月19日		
F05	傑	泉享仁兄	3月20日		「蘭圃仁兄均鑑」
F06	譚傑生	泉享蘭圃仁兄	3月21日		
F07	譚傑生		3月22日		漢城同順泰宛か(内容より)
F08	譚傑生	泉享蘭圃仁兄	3月23日		
F09	譚傑生		3月25日		漢城同順泰宛か(内容より)
F10	晴湖	傑生三弟	3月28日		
F11	仁棧	傑生叔台大人	3月29日		
F12	晴湖 [仁川同順泰書柬]	傑生三弟	3月29日		
F13	陳如三	傑生仁翁	4月1日		
F14	晴湖	傑生三弟	4月1日		
F15	晴湖	傑生三弟	4月3日		
F16	陳如三 [仁川怡生号書柬]	傑生仁翁大人	4月4日		
F17	廷章	傑生叔台大人	甲4月4日		
F18	仁棧	傑生叔台大人	4月4日		
F19	晴湖	傑生三弟	4月5日		
F20	仁棧 廷唐	傑生叔台大人	4月7日		
F21	晴湖	傑生三弟	4月7日		
F22	晴湖	傑生三弟	4月4日		
F23	仁棧 廷唐	傑生叔台大人	4月8日		
F24	晴湖	傑生三弟	4月9日		
F25	仁棧	傑生叔台大人	4月10日		
F26	仁棧	傑生叔台大人	4月11日		
F27	傑	泉享仁兄	4月10日		「蘭圃仁兄均鑑」
F28	傑	泉享仁兄	4月16日		「蘭圃仁兄均鑑」
F29	傑	泉享仁兄	4月17日		
F30	傑	泉享仁兄	4月17日		
F31	何挺生	傑生仁兄大人	甲3月22日		
F32	邵蘭圃	傑生仁兄大人	甲3月25日		
F33	(破損)	傑生叔台大人	(破損)		
F34	李泉享	傑生叔台大人	3月26日		
F35	傑生	泉享仁兄	4月21日		「蘭圃仁兄均鑑」
F36	傑	泉享仁兄	4月22日		
F37	仁棧 [同順泰書柬]	傑生叔台大人	4月25日		
F38	廷唐	傑生叔台大人	4月25日		
F39	仁棧	傑生叔台大人	4月27日		
F40	晴湖 [仁川同順泰書柬]	傑生三弟	(破損)		
F41	仁棧 [同順泰書柬]	同順泰本号	4月28日		
F42	傑	泉享蘭圃仁兄	4月28日		
F43	傑	泉享蘭圃仁兄	4月29日		
F44	譚傑生	蘭圃仁兄	4月30日		
F45	譚傑生		4月30日		漢城同順泰宛か(内容から)
F46	傑生	泉享仁兄	4月30日		「蘭圃仁兄均鑑」
F47	廷章	傑生叔台大人	5月7日		
F48	晴湖	傑生三弟	5月6日		
F49	晴湖	傑生三弟	5月9日		
F50	仁棧 [同順泰書柬]	傑生叔台大人	5月10日		
F51	李泉享	傑生叔台大人	5月11日		
F52	晴湖	傑生三弟	5月12日		
F53	李泉享	傑生叔台大人	5月12日		
F54	李泉享	傑生叔台大人	5月13日		
F55	李泉享	傑生叔台大人	5月13日		
F56	李泉享	傑生叔台大人	5月14日		
F57	晴湖	傑生三弟	5月13日		
F58	晴湖	傑生三弟	5月14日		

F59	李泉享	傑生叔台大人	5月14日		
F60	晴湖	傑生三弟	5月14日		
F61	陳如三〔仁川怡生号書柬〕	傑生仁翁大人	5月15日		

G冊（表題「同泰来信下／甲午五月／至六月」）

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
G01	晴湖	傑生三弟	5月17日		
G02	李泉享	傑生叔台大人	5月17日		
G03	(破損)	傑生叔台大人	5月■日		
G04	晴湖	傑生三弟	5月18日		
G05	李泉享	傑生叔台大人	5月18日		
G06	晴湖	傑生三弟	5月19日		
G07	廷庠	傑生三叔大人	5月19日		
G08	廷庠	傑生三叔大人	5月20日		
G09	李泉享	傑生叔台大人	(破損)		
G10	晴湖	傑生三弟	5月20日		
G11	李泉享	傑生叔台大人	5月20日		
G12	晴湖	傑生三弟	5月23日		
G13	仁棧	傑生叔台大人	(破損)		
G14	仁棧	傑生叔台大人	5月25日		
G15	晴湖	傑生三弟	5月25日		
G16	晴湖	傑生三弟	5月25日		
G17	廷庠	傑生叔台大人	5月27日		
G18	李泉享	傑生叔台大人	5月27日		
G19	羅明階	傑生仁兄大人	〔月欠〕27日		
G20	晴湖	傑生三弟	5月27日		
G21	晴湖	傑生三弟	5月28日		
G22	晴湖	傑生三弟	5月29日		
G23	仁棧	傑生叔台大人	5月29日		
G24	晴湖	傑生三弟	6月1日		
G25	廷庠	傑生叔台大人	6月1日		
G26	晴湖	傑生三弟	6月2日		
G27	廷庠	傑生叔台大人	6月3日		
G28	晴湖	傑生三弟	6月4日		
G29	仁棧〔同順泰書柬〕	傑生叔台大人	6月4日		
G30	仁棧〔同順泰書柬〕	傑生叔台大人	6月5日		

H冊（表題「同泰来信上／癸卯元月／至三月」）

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
H01	(破損)	(破損)	(破損)		
H02	〔仁川同順泰書柬〕	傑生叔台	癸1月13日		
H03	李益卿	傑生大兄大人	1月14日		
H04	李益卿	(破損)	1月16日		漢城同順泰宛か(内容より)
H05	李益卿	傑生大兄大人	1月■日		
H06	李益卿	傑生大兄大人	1月19日		
H07	李益卿	傑生大兄大人	1月20日		
H08	李益卿	傑生大兄大人	1月17日		
H09	李益卿	傑生大兄大人	1月24日		
H10	李益卿	傑生大兄大人	1月25日		
H11	李益卿	傑生大兄大人	1月26日		
H12	李益卿	傑生大兄大人	1月27日		
H13	李益卿	傑生大兄大人	1月27日		
H14	李益卿	傑生大兄大人	1月28日		
H15	李益卿	傑生大兄大人	1月29日		
H16					H15の追伸か
H17	李益卿	傑生大兄大人	2月1日		
H18	李益卿	傑生大兄大人	2月1日		
H19	李益卿	傑生大兄大人	2月2日		
H20	李益卿	傑生大兄大人	2月3日		
H21	李益卿	傑生大兄大人	2月4日		
H22	李益卿	傑生大兄大人	2月4日		
H23	李益卿	傑生大兄大人	2月5日		

H24	李益卿	傑生大兄大人	2月6日		
H25	李益卿	傑生大兄大人	2月7日		
H26	李益卿	傑生大兄大人	2月8日		
H27	李益卿	傑生大兄大人	2月9日		
H28	傑生	其■〔榮?〕	2月10日		
H29	傑生	其■〔榮?〕	2月10日		
H30	古達庭	傑生仁翁大人	癸2月11日		
H31	傑生	其■〔榮?〕	2月14日		
H32	李益卿	傑生大兄大人	2月14日		
H33	李益卿	傑生大兄大人	2月15日		
H34	李益卿	傑生大兄大人	2月16日		
H35	李益卿	傑生大兄大人	2月16日		
H36	李益卿	傑生大兄大人	2月17日		
H37	傑生	其■〔榮?〕	2月19日		
H38	古達庭	傑生仁翁大人	癸卯2月20日		
H39	李益卿	傑生大兄大人	2月22日		
H40					H39の追伸か
H41	李益卿	傑生大兄大人	2月24日		
H42	李益卿	傑生大兄大人	2月27日		
H43	李益卿	傑生大兄大人	3月1日		
H44	古達庭	傑生仁翁大人	癸卯2月■日		
H45	李益卿	傑生大兄大人	3月2日		
H46	李益卿	傑生大兄大人	3月4日		
H47	李益卿	傑生大兄大人	3月6日		
H48	李益卿	傑生大兄大人	3月7日		
H49	(破損)	(破損)	(破損)		H48の追伸か
H50	李益卿	傑生大兄大人	3月5日		
H51	[仁川同順泰書束]	漢庄同順泰本号列位先生	癸3月11日		
H52	古達庭	傑生仁翁大人	癸卯3月20日		

Ⅰ冊 (表題「同泰來信 中／癸卯四月／至十月」)

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
I01	李益卿	傑生大兄大人	4月2日		
I02	李益卿	傑生大兄大人	4月8日		
I03	古達庭	傑生仁翁大人	癸卯4月11日		
I04	何介眉	傑生叔台大人	癸4月12日		
I05	李益卿	傑生大兄大人	4月17日		
I06	李益卿	傑生大兄大人	4月30日		
I07	廷廣	傑生叔台大人	5月10日		
I08	李益卿	傑生大兄大人	5月2日		
I09	李益卿	傑生大兄大人	5月7日		
I10	李益卿	傑生大兄大人	5月10日		
I11	李益卿	傑生大兄大人	5月13日		
I12	李益卿	傑生大兄大人	5月25日		
I13	李益卿	傑生大兄大人	閏5月1日		
I14	古達庭	傑生仁翁大人	癸閏5月18日		
I15	周子齊〔仁川義生盛書束〕	傑生光兄大人	閏5月5日		
I16	李益卿	傑生大兄大人	閏5月27日		
I17	古達庭〔古達庭書束〕	傑生仁翁大人	閏5月23日		
I18	古達庭	傑生仁翁大人	癸卯閏5月26日		
I19	何仲候	傑生叔台大人	閏5月3日		
I20	李益卿	傑生大兄大人	6月25日		
I21	李益卿	傑生大兄大人	6月16日		
I22	李益卿	傑生大兄大人	閏5月29日		
I23	李益卿	傑生大兄大人	閏5月29日		
I24	李益卿	傑生大兄大人	6月1日		
I25	李益卿	傑生大兄大人	閏5月20日		
I26	李益卿	傑生大兄大人	7月15日		
I27	(破損)	傑生仁翁大人	(破損)		
I28	李益卿	傑生大兄大人	閏5月25日		
I29	古達庭	傑生仁翁大人	癸6月6日		
I30	古達庭	傑生仁翁大人	癸卯6月18日		

131	李益卿	傑生大兄大人	閏5月9日		
132	李益卿 [仁川同順泰書束]	傑生大兄大人	6月27日		
133	李益卿	傑生大兄大人	7月5日		
134	李益卿	傑生大兄大人	7月18日		
135	周祺蘭	傑生仁翁大人	癸卯7月21日		
136	周祺蘭	傑生仁翁大人	癸卯7月22日		
137	李益卿 [仁川同順泰書束]	象喬仁兄大人	癸卯8月3日		「秋恒仁兄大人台照」
138	李益卿 [仁川同順泰書束]	象喬仁兄大人	8月6日		「秋恒仁兄大人台照」
139	李益卿	傑生大兄大人	8月10日		
140	李益卿	傑生大兄大人	8月11日		
141	李益卿 [仁川同順泰書束]	傑生大兄大人	8月12日		
142	李益卿	傑生大兄大人	8月13日		
143	李益卿	傑生大兄大人	8月18日		
144	[仁川同順泰書束]	傑生叔台大人	8月24日		
145	李益卿	傑生大兄大人	8月28日		
146	李益卿	傑生大兄大人	9月2日		
147	李益卿	傑生大兄大人	9月8日		
148	李益卿	傑生大兄大人	9月14日		
149	李益卿	傑生大兄大人	9月16日		
150	李益卿	象喬仁兄大人	9月25日		
151	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯9月27日		
152	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯9月28日		
153	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯9月30日		
154	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯10月5日		
155	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯10月6日		
156	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯10月8日		

1冊 (表題「同泰来信 下／癸卯十月／至十二月」)

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
J01	李益卿	象喬仁兄大人	10月9日		
J02	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯10月14日		
J03	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯10月20日		
J04	李益卿	象喬仁兄大人	10月16日		
J05	李益卿	象喬仁兄大人	10月17日		
J06	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯10月21日		
J07	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯10月22日		
J08	李益卿	象喬仁兄大人	10月23日		
J09	仁同順泰 [仁川同順泰書束]	象喬仁兄	癸10月23日		
J10	[仁川同順泰書束]	漢城本号	癸10月23日		「艚単」。J09の付属書か。
J11	李益卿	象喬仁兄大人	10月24日		
J12	何介眉	象喬仁兄大人	癸10月25日		
J13	[仁川同順泰書束]	漢庄本号	癸卯10月25日		「艚単」。J12の付属書か。
J14	李益卿	象喬仁兄大人	10月26日		
J15	李益卿	象喬仁兄大人	10月26日		
J16	李益卿	象喬仁兄大人	10月27日		
J17	李益卿 [仁川同順泰書束]	象喬仁兄大人	10月28日		
J18	何介眉	象喬仁兄大人	10月19日		
J19	何介眉	象喬仁兄	癸11月■日		
J20	(破損)	(破損)	(破損)		
J21	李益卿	象喬仁兄大人	11月3日		
J22	李益卿	象喬仁兄大人	11月2日		
J23	何介眉	象喬仁兄大人	癸11月2日		
J24	何介眉 [仁川同順泰書束]	漢庄本号譚象喬兄	癸11月3日		
J25	[仁川同順泰書束]	漢庄本号	癸11月3日		J24の付属書か(送り状)
J26	(破損)	象喬仁兄大人	(破損)		
J27	李益卿	象喬仁兄大人	11月4日		
J28	李益卿	象喬仁兄大人	11月5日		
J29	李益卿	象喬仁兄大人	11月6日		
J30	李益卿	象喬仁兄大人			
J31	李益卿	象喬仁兄大人	11月8日		
J32	何介眉	象喬仁兄大人	癸11月9日		
J33	李益卿	象喬仁兄大人	11月10日		

J34	李益卿	象喬仁兄大人	11月11日		
J35	李益卿	象喬仁兄大人	11月12日		
J36	介眉	象喬仁兄	癸11月13日		
J37	何介眉	漢庄本号譚象喬仁兄	癸11月13日		
J38	李益卿	象喬仁兄大人	11月14日		
J39	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯11月16日		
J40	李益卿	象喬仁兄大人	11月17日		
J41	何介眉	象喬仁兄大人	癸11月17日		
J42	李益卿	象喬仁兄大人	11月17日		
J43	李益卿	象喬仁兄大人	癸11月20日		
J44	李益卿	象喬仁兄大人	癸11月22日		
J45	李益卿	象喬仁兄大人	癸11月21日		
J46	李益卿	象喬仁兄大人	癸12月1日		
J47	李益卿	象喬仁兄大人	癸12月9日		
J48	古達庭[古達庭書東]	象喬仁兄大人	癸卯11月19日		
J49	李益卿	象喬仁兄大人	癸11月28日		
J50	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯12月3日		
J51	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯12月11日		
J52	李益卿	象喬仁兄大人			J51の追伸
J53	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯12月13日		
J54	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯12月17日		
J55	李益卿	象喬仁兄大人	癸12月15日		
J56	[仁川同順泰書東]	漢庄本号列位仁兄	癸12月17日		到着貨物の明細表
J57	李益卿	象喬仁兄大人	癸12月17日		
J58	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯12月19日		
J59	李益卿	象喬仁兄大人	12月23日		
J60	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯12月22日		
J61	何介眉	象喬仁兄大人	癸12月23日		
J62	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯[月日欠]		
J63	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯12月27日		
J64	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯12月24日		
J65	李益卿	象喬仁兄大人	癸卯12月28日		

K冊 (表題「同泰来信 単／乙巳正月／至七月」)

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
K01	群枝[全州同順泰書東]	傑生叔台大人	乙1月■日	18号	
K02	群枝[全州同順泰書東]	傑生叔台大人	乙巳1月5日	(破損)	
K03	李静波[群山同順泰書東]	(破損)	乙巳1月7日	(破損)	
K04	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	1月11日	304号	
K05	(破損)	傑生叔大人	1月14日	305号	李静波発か(書式より)
K06	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年1月21日	306号	干支と月日は別箇所に記載
K07	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年1月26日	307号	干支と月日は別箇所に記載
K08	群枝[全州同順泰書東]	傑生叔台大人	乙2月3日	21号	
K09	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年2月3日	308号	干支と月日は別箇所に記載
K10	群枝[全州同順泰書東]	傑生叔台大人	乙2月6日	22号	
K11	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年2月9日	309号	干支と月日は別箇所に記載
K12	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年2月12日	310号	干支と月日は別箇所に記載
K13	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年2月14日	311号	干支と月日は別箇所に記載
K14	群枝[全州同順泰書東]	傑生叔台大人	乙2月13日	23号	
K15	群枝[全州同順泰書東]	傑生叔台大人	乙2月23日	24号	
K16	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年2月18日	312号	干支と月日は別箇所に記載
K17	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年3月1日	313号	干支と月日は別箇所に記載
K18	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年3月4日	314号	干支と月日は別箇所に記載
K19	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年3月11日	315号	干支と月日は別箇所に記載
K20	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年3月19日	316号	干支と月日は別箇所に記載
K21	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年3月20日	317号	干支と月日は別箇所に記載
K22	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年4月6日	318号	干支と月日は別箇所に記載
K23	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年4月16日	319号	干支と月日は別箇所に記載
K24	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年4月17日	320号	干支と月日は別箇所に記載
K25	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年4月26日	321号	干支と月日は別箇所に記載
K26	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年4月28日	322号	干支と月日は別箇所に記載
K27	李静波[群山同順泰書東]	傑生叔大人	乙巳年5月4日	323号	干支と月日は別箇所に記載

K28	李静波 [群山同順泰書柬]	傑生叔大人	乙巳年5月19日	324号	干支と月日は別箇所に記載
K29	李静波 [群山同順泰書柬]	傑生叔大人	乙巳年5月22日	325号	干支と月日は別箇所に記載
K30	李静波 [群山同順泰書柬]	傑生叔大人	乙巳年6月10日	326号	干支と月日は別箇所に記載
K31	李静波 [群山同順泰書柬]	傑生叔大人	乙巳年6月21日	327号	干支と月日は別箇所に記載
K32	李静波 [群山同順泰書柬]	傑生叔大人	乙巳年6月27日	328号	干支と月日は別箇所に記載
K33	李静波 [群山同順泰書柬]	傑生叔大人	乙巳年7月5日	329号	干支と月日は別箇所に記載
K34	李静波 [群山同順泰書柬]	傑生叔大人	乙巳年7月9日	330号	干支と月日は別箇所に記載
K35	李静波	傑生叔大人	乙巳年7月9日		
K36	李偉初 [偉初敬緘]	傑生仁兄大人	7月6日		
K37	李偉初 [偉初敬緘]	傑生仁兄大人	7月2日		「書於南浦」とあり
K38	李偉初 [偉初敬緘]	傑生叔台大人	2月7日		

L冊 (表題「同泰来信 乾／乙巳正月／至二月」)

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
L01	晴湖	同順泰本号傑生三弟	1月4日		
L02	晴湖	同順泰本号	1月■日		
L03	晴湖 [仁川同順泰書柬]	同順泰本号傑生三弟	1月6日		
L04	晴湖	傑生三弟	1月7日		
L05	晴湖	傑生三弟	1月9日		
L06	譚象齋 [仁川同順泰書柬]	同順泰本号列位先生	乙巳年1月10日		
L07	象齋	傑生三叔大人	乙巳年1月11日		
L08	象齋	(破損)	乙巳年1月12日		漢城同順泰宛か(内容から)
L09	象齋	傑生三叔大人	乙巳年1月13日		
L10	象齋	傑生三叔大人	乙巳年1月14日		
L11	象齋 [仁川同順泰書柬]	傑生三叔大人	乙巳年1月15日		
L12	古達庭	傑生仁翁大人	乙巳年1月15日		鎮南浦より(内容から)
L13	象齋	傑生三叔大人	乙巳年1月16日		
L14	象齋	傑生三叔大人	乙巳年1月17日		
L15	象齋	傑生三叔大人	乙巳年1月17日		
L16	象齋	傑生三叔大人	乙巳年1月18日		
L17	象齋	傑生三叔大人	乙巳年1月18日		
L18	象齋	傑生三叔大人	乙巳年1月19日		
L19	象齋	傑生三叔大人	乙巳年1月20日		
L20	象齋	傑生三叔大人	乙巳年1月21日		
L21	象齋	傑生三叔大人	乙巳年1月22日		
L22	象齋 [仁川同順泰書柬]	傑生三叔大人	乙巳年1月23日		
L23	象齋 [仁川同順泰書柬]	傑生三叔大人	乙巳年1月24日		
L24	梁棧昭	傑生叔台大人	1月24日		「自仁川」
L25	象齋	傑生三叔大人	乙巳年1月25日		
L26	黎子祥	傑生仁兄大人	1月26日		「勅于元山領署」
L27	象齋 [仁川同順泰書柬]	傑生三叔大人	乙巳年2月1日		
L28	象齋	傑生三叔大人	(破損)		
L29	象齋 [仁川同順泰書柬]	傑生三叔大人	乙巳年2月3日		
L30	象齋 [仁川同順泰書柬]	傑生三叔大人	乙巳年2月6日		
L31	象齋	其新賢侄	乙巳年2月11日		漢城同順泰宛か(内容から)
L32	象齋	傑生三叔大人	乙巳年2月16日		
L33	象齋	傑生三叔大人	乙巳年2月16日		
L34	象齋	傑生三叔大人	乙巳年2月17日		
L35	象齋	傑生三叔大人	乙巳年2月18日		
L36	錢端甫	傑生仁兄大人			
L37	総領事 錢	同順泰宝号	(月不詳)12日		
L38	黎子祥	傑生我哥大人	2月7日		「勅于元山領署」

M冊 (表題「同泰来信 坤／乙巳二月／至四月」)

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
M01	象齋	其■(梨?)賢侄	乙巳年2月11日		
M02	象齋	傑生三叔大人	乙巳年2月20日		
M03	黃泰芬	傑生叔台大人	乙巳年2月■日		
M04	象齋	傑生三叔大人	乙巳年2月21日		
M05	象齋	傑生三叔大人	乙巳年2月21日		
M06	象齋	傑生三叔大人	乙巳年2月22日		
M07	象齋	傑生三叔大人	乙巳年2月24日		

M08	黎子祥	傑生仁兄大人	2月24日		
M09	象喬	傑生三叔大人	乙2月25日		
M10	象喬 [仁川同順泰書柬]	傑生三叔大人	2月26日		
M11	黎子祥	傑生仁兄大人	2月26日		「勅于元山領署」
M12	象喬	傑生三叔大人	乙2月27日		
M13	傑生	其■[梨?]	2月29日		
M14	象喬	秋明賢侄	乙2月30日		
M15	仁号	漢庄本号	2月30日		
M16	象喬	其■[梨?]賢侄	乙3月1日		「漢本号列位先生均照」
M17	象喬	其■[梨?]賢侄	乙3月3日		
M18	傑生	其■[梨?]	3月3日		
M19	傑生	其■[梨?]	3月4日		
M20	傑生	其■[梨?]	3月5日		
M21	仁号	漢庄本号	3月5日		
M22	象喬	傑生三叔大人	乙3月7日		
M23	黎子祥	傑生仁兄大人	3月8日		「勅于元山領署」
M24	象喬	傑生三叔大人	乙3月8日		
M25	唐恩桐	傑翁仁兄大人	3月8日		發信者は鎮南浦領事
M26	象喬	傑生三叔大人	乙3月9日		
M27	象喬	傑生三叔大人	乙3月10日		
M28	梁■	傑生仁兄	3月11日		
M29	象喬	傑生三叔大人	乙3月12日		
M30	象喬	傑生三叔大人	乙3月12日		
M31	象喬	傑生三叔大人	乙3月13日		
M32	象喬	傑生三叔大人	乙3月13日		
M33	象喬	秋明賢侄	3月15日		「本号同事先生均照」
M34	象喬	其新賢侄	乙3月19日		
M35	象喬	秋明賢侄	乙3月19日		
M36	象喬	傑生三叔大人	乙3月22日		
M37	黎子祥 [元山清領署]	傑生仁兄大人	3月23日		「勅于元山領署」
M38	象喬	傑生三叔大人	乙3月25日		
M39	象喬	秋明賢侄	乙3月27日		
M40	象喬	秋明賢侄	乙3月29日		
M41	象喬	傑生三叔大人	乙4月2日		
M42	象喬	傑生三叔大人	乙4月3日		
M43	廷唐	傑生叔台大人	4月4日		
M44	象喬	傑生三叔大人	乙4月5日		
M45	象喬	傑生三叔大人	乙4月6日		
M46	象喬	傑生三叔大人	乙4月7日		
M47	梁■	傑生仁兄大人	4月7日		
M48	象喬	傑生三叔大人	(破損)		

N冊 (表題「同泰來信 単／乙巳／丙午」)

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
N01	梁綸卿 [同泰号書柬]	傑生内弟 [以下損傷]	(破損)		
N02	羅子明 [香港上環安和泰書柬]	傑生仁兄大人	乙巳1月6日	84号	
N03	羅耀箴 [元山同豊泰]	傑生仁兄大人	12月26日		
N04	梁綸卿 [同泰号書柬]	傑生内弟 [以下損傷]	1月17日	617号	
N05	梁綸卿 [同泰号書柬]	傑生内弟 象喬内侄	1月7日	616号	
N06	羅子明	傑生仁兄大人	1月19日	85号	
N07	梁綸卿 [同泰号書柬]	同順泰宝号	1月19日	不列号	
N08	梁綸卿 [同泰号書柬]	傑生賢内弟 象喬賢内侄	1月21日	618号	
N09	羅耀箴 [元山同豊泰書柬]	傑生仁兄大人	1月18日		
N10	羅耀箴 [元山同豊泰書柬]	傑生仁兄大人	1月26日		
N11	梁綸卿 [同泰号書柬]	傑生内弟 象喬内侄	2月4日	619号	
N12	梁綸卿 [同泰号書柬]	傑生内弟 象喬内侄	2月6日	620号	
N13	陳達生 [神戸祥隆号書柬]	傑生仁兄大人	2月?日		
N14	何挺生	傑生仁兄大人	甲4月1日		
N15	何挺生	傑生仁兄大人	甲4月1日		
N16	傑生	象喬侄	4月29日		
N17	傑生	象喬侄	4月27日		
N18	瑞雲 [仁川同順泰書柬]	傑生叔台大人	丙午4月22日		

N19	瑞雲〔仁川同順泰書柬〕	傑生叔台大人	丙4月20日		
N20	廷瑚	傑生尊親大人	4月19日		
N21	梁■堂	傑生仁兄大人	4月19日		
N22	廷瑚	傑生尊親大人	4月18日		
N23	廷庠	傑生叔台大人	4月18日		
N24	廷庠	傑生叔台大人	4月16日		
N25	瑞雲〔仁川同順泰書柬〕	傑生叔台大人	丙午4月16日		
N26	瑞雲〔仁川同順泰書柬〕	傑生叔台大人	丙午4月15日		
N27	廷瑚	象喬二兄大人	■月14日		
N28	瑞雲〔仁川同順泰書柬〕	象喬仁兄大人	丙4月13日		
N29	瑞雲〔仁川同順泰書柬〕	傑生叔台大人	丙4月8日		
N30	李瑞雲〔仁川同順泰書柬〕	傑生叔台大人	丙4月7日		
N31	李瑞雲〔仁川同順泰書柬〕	傑生叔台大人	丙4月5日		
N32	瑞雲〔仁川同順泰書柬〕	傑生叔台大人	丙午4月4日		
N33	黃泰■〔巨昌泰書柬〕	傑生叔台大人	丙午4月3日		
N34	黃泰■〔巨昌泰書柬〕	傑生叔台大人	丙午4月3日		
N35	瑞雲〔仁川同順泰書柬〕	傑生叔台大人	丙4月3日		
N36	瑞雲〔仁川同順泰書柬〕	傑生叔台大人	丙4月2日		
N37	象喬	傑生三叔大人	丙3月3日		
N38	瑞雲	傑生叔台大人	丙3月2日		
N39	傑生	象喬侄	3月1日		
N40	瑞雲	傑生叔台大人	丙3月3日		
N41	仁庄	漢庄本号	3月10日	66号	
N42	〔仁川同意樓〕	漢城同順泰大宝号	3月17日		
N43	〔群山同順泰〕	傑生叔大人	〔月欠〕8日		
N44	〔破損〕	傑生叔大人	9月5日	340号	李静波発か(書式より)
N45	李静波〔群山同順泰書柬〕	傑生叔大人	乙巳7月21日	333号	干支と月日は別箇所に記載
N46	李静波〔群山同順泰書柬〕	傑生叔大人	乙巳(月欠)	〔破損〕	
N47	李静波〔群山同順泰書柬〕	傑生叔大人	乙巳7月17日	332号	干支と月日は別箇所に記載
N48	李静波〔群山同順泰書柬〕	傑生叔大人	乙巳9月14日	342号	干支と月日は別箇所に記載
N49	李静波〔群山同順泰書柬〕	傑生叔大人	乙巳8月3日	335号	干支と月日は別箇所に記載
N50	李静波〔群山同順泰書柬〕	傑生叔大人	乙巳8月6日	336号	干支と月日は別箇所に記載
N51	李静波〔群山同順泰書柬〕	傑生叔大人	乙巳■月■日	360号	干支と月日は別箇所に記載

○冊 (表題「同泰来信 乾／一月／至三月」)

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
O01	仁庄	漢庄本号		不列号	
O02	仁庄	漢庄	2月11日		O01の追伸か
O03	仁庄	漢庄本号	2月14日	42号	
O04	仁庄	漢庄本号	2月15日	43号	
O05	仁庄	漢庄本号	2月15日	不列号	
O06	仁庄	漢庄本号	2月16日	46号	
O07	仁庄	漢庄本号	2月16日	45号	
O08	仁庄	漢庄本号	2月17日	47号	
O09	仁庄	漢庄本号	2月18日	48号	
O10	仁庄	漢庄本号	2月19日	50号	
O11	仁庄	漢庄本号	2月19日	続50号	
O12	仁庄	漢庄本号	2月18日	49号	
O13	仁庄	漢庄	〔月欠〕19日		
O14	仁庄	漢庄	〔月欠〕17日		
O15	仁庄	漢庄本号	2月20日	不列号	
O16	仁庄	漢庄本号	2月20日	51号	
O17	仁庄	漢庄本号	2月20日	続51号	
O18	仁庄	漢庄本号		不列号	
O19	仁庄	漢庄本号	2月22日	52号	
O20	仁庄	漢庄本号	2月24日	53号	
O21	仁庄	漢庄本号	2月25日	54号	
O22	仁庄	漢庄本号	2月27日	55号	
O23	仁庄	漢庄本号	2月27日	続55号	
O24	仁庄	漢庄本号	2月27日	続55号	
O25	仁庄	漢庄本号	2月27日	続55号	
O26	仁庄	漢庄本号	2月28日	続56号	

O27	仁庄	漢庄本号	2月28日	56号	
O28	仁庄	漢庄本号	2月28日	続56号	
O29	仁庄	漢庄本号	2月28日	57号	
O30	何麗堂	傑生仁兄大人	2月29日		
O31	仁庄	漢庄本号	3月1日	58号	
O32	德謙	傑生賢棧	3月2日		
O33	仁庄	漢庄本号	3月2日	59号	
O34	仁庄	漢庄本号	3月3日	60号	
O35	仁庄	漢庄本号	3月5日	不列号	
O36	仁庄	漢庄本号	3月4日	61号	
O37	仁庄	漢庄本号	3月5日	62号	
O38	仁庄	漢庄本号	3月5日	続62号	
O39	仁庄	漢庄本号	3月6日	63号	
O40	何麗堂	傑生仁兄大人	3月6日		
O41	仁庄	漢庄本号	3月7日	64号	
O42	仁庄	漢庄本号	3月7日	続64号	
O43	仁庄	漢庄本号	3月8日	65号	
O44	仁庄	漢庄本号	3月9日	続65号	
O45	仁庄	漢庄本号	3月11日	67号	
O46	仁庄	漢庄本号	3月14日	不列号	
O47	仁庄	漢庄本号	3月13日	68号	
O48	仁庄	漢庄本号	3月16日	69号	
O49	仁庄	漢庄本号	3月17日	70号	
O50	仁庄	漢庄本号	3月18日	71号	
O51	仁庄	漢庄本号	3月18日	続71号	
O52	仁庄	漢庄本号	3月18日	続71号	

P冊（表題「同泰来信 坤／三月」）

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
P01	仁庄	漢庄本号	3月19日	72号	
P02	仁庄	漢庄本号	3月20日	73号	
P03	仁庄	漢庄本号	3月20日	続73号	
P04	仁庄	漢庄本号	3月21日	74号	
P05	仁庄	漢庄本号	3月23日	75号	
P06	仁庄	漢庄本号	3月24日	76号	
P07	仁庄	漢庄本号	3月24日	続76号	
P08	仁庄	漢庄本号	3月27日	続78号	
P09	仁庄	漢庄本号	3月27日	78号	
P10	仁庄	漢庄本号	3月27日	続78号	
P11	仁庄	漢庄本号	3月28日	続79号	
P12	仁庄	漢庄本号	3月28日	79号	
P13	仁庄	漢庄本号	3月28日	80号	
P14	仁庄	漢庄本号	3月30日	81号	
P15	仁庄	漢庄本号	3月26日	77号	
P16	仁庄	漢庄本号	4月1日	82号	
P17	仁庄	漢庄本号	4月3日	83号	
P18	仁庄	漢庄本号	4月3日	続83号	
P19	仁庄	漢庄本号	4月4日	84号	
P20	仁庄	漢庄本号	4月5日	85号	
P21	仁庄	漢庄本号	4月5日	続85号	
P22	仁庄	漢庄本号	4月7日	続86号	
P23	仁庄	漢庄本号	4月8日	87号	
P24	仁庄	漢庄本号	4月7日	86号	
P25	仁庄	漢庄本号	4月8日	続87号	
P26	仁庄	漢庄本号	4月9日	89号	
P27	羅煜甫「元山同豊泰書柬」	同順泰大宝号先生諸位	己3月20日		
P28	仁庄	漢庄本号	4月11日	90号	
P29	仁庄	漢庄本号	4月13日		
P30	仁庄	漢庄本号	4月14日	91号	
P31	何麗堂	漢庄本号列位先生	4月18日	不列号	
P32	仁庄	漢庄本号	4月15日	92号	
P33	仁庄	漢庄本号	4月15日	94号	

P34	仁庄	漢庄本号	4月20日	95号	
P35	仁庄	漢庄本号	4月20日	続95号	
P36	仁庄	漢庄本号	4月21日	96号	
P37	仁庄	漢庄本号	4月21日	97号	
P38	仁庄	漢庄本号	4月23日	98号	
P39	仁庄	漢庄本号	4月23日	続98号	
P40	何麗堂	漢庄本号列位先生	4月26日	不列号	
P41	何麗堂	漢庄本号列位仁翁	4月26日	不列号	
P42	仁庄	漢庄本号	4月23日	99号	
P43	何麗堂	漢庄本号列位先生	4月24日	不列号	
P44	何麗堂	漢庄本号列位先生	4月28日	不列号	
P45	仁庄	漢庄本号	4月30日	100号	
P46	仁庄	漢庄本号	5月1日	101号	
P47	仁庄	漢庄本号	5月2日	102号	
P48	仁庄	漢庄本号	5月3日	103号	
P49	仁庄	漢庄本号	5月4日	104号	
P50	何麗堂〔仁川同順泰書東〕	漢庄本号列位先生	5月5日	不列号	
P51	仁庄	漢庄本号	5月6日	続105号	
P52	仁庄	漢庄本号	5月7日	106号	
P53	仁庄	漢庄本号	5月8日	107号	
P54	仁庄	漢庄本号	5月8日	不列号	
P55	仁庄	漢庄本号	5月6日	105号	

Q冊（表題「同泰来信 単／仁川来信」）

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
Q01	晴	傑生弟	1月7日		
Q02	晴湖	傑生弟	1月4日		
Q03	晴湖	傑生弟	1月15日		
Q04	廷銳	叔父大人			宛名個人名を記さず
Q05	晴	傑生弟	1月16日		
Q06	廷銳	叔父大人	1月16日		
Q07	廷銳	傑生叔父大人	〔月不明〕17日		
Q08	晴	傑生弟	1月18日		
Q09	廷銳	叔父大人	1月18日		宛名個人名を記さず
Q10	廷銳	叔父大人	1月18日		宛名個人名を記さず
Q11	晴	傑生弟	1月19日		
Q12	晴	傑生弟	1月20日		
Q13	（破損）	（破損）	（破損）		
Q14	廷銳	叔父大人			宛名個人名を記さず
Q15	廷銳	叔父大人	1月21日		宛名個人名を記さず
Q16	晴	傑生弟	1月23日		
Q17	廷銳	傑生叔父	〔月不明〕22日		
Q18	廷銳	叔父大人	1月23日		宛名個人名を記さず
Q19	廷銳	叔父大人	1月22日		宛名個人名を記さず
Q20	晴	傑生弟	1月24日		
Q21	晴	傑生弟	1月25日		
Q22	（破損）	（破損）	（破損）		
Q23	廷銳	叔父大人	1月25日		宛名個人名を記さず
Q24	廷銳	叔父大人	（破損）		宛名個人名を記さず
Q25	晴	傑生弟	1月22日		
Q26	廷銳	叔父大人	（破損）		宛名個人名を記さず
Q27	廷銳	叔父大人	1月25日		宛名個人名を記さず
Q28	晴	傑生弟	1月26日		
Q29	廷銳	叔父大人	1月27日		宛名個人名を記さず
Q30	晴	傑生弟	1月28日		
Q31	晴	傑生弟	1月28日		
Q32	廷銳	叔父大人	2月3日		宛名個人名を記さず
Q33	廷銳	叔父大人	2月4日		宛名個人名を記さず
Q34	晴	傑生弟	2月4日		
Q35	晴	傑生弟	2月4日		
Q36	廷銳	叔父大人	2月5日		宛名個人名を記さず
Q37	晴	傑生弟	2月7日		

Q38	晴	傑生弟	2月10日		
Q39	廷銳	叔父大人	2月9日		宛名個人名を記さず
Q40	廷銳	叔父大人	2月12日		宛名個人名を記さず
Q41	晴	傑生弟	2月14日		
Q42	徳謙	傑生謙弟	(月欠)14日		
Q43	米郭泉 [仁川■]	傑生仁翁大人	2月15日		
Q44	晴	傑生弟	2月17日		

R冊 (表題「同泰来信 単／同泰来信」)

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
R01	梁綸卿 [同泰号書柬]	傑生賢弟	己12月23日	1号	
R02	梁綸卿 [同泰号書柬]	傑生賢弟	庚1月15日	2号	
R03	梁綸卿 [同泰号書柬]	傑生賢弟	1月16日		R02の追伸か
R04	羅柱臣 [同泰号書柬]	傑生仁兄	1月16日	続■号	
R05	梁綸卿 [同泰号書柬]	同順泰本号傑生賢弟	1月18日	3号	
R06	梁綸卿 [同泰号書柬]	同順泰本号傑生賢弟	1月25日	4号	
R07	譚沛森 [横浜福和号書柬]	同順泰宝行傑生宗兄大人	1月22日	元号	
R08	羅煜甫 [元山同豊泰書柬]	傑生仁翁大人	庚1月22日		
R09	陳達生 [神戸祥隆号書柬]	同順泰宝号傑生仁兄大人	庚2月3日		
R10	陳達生 [神戸祥隆号書柬]	傑生仁兄大人	庚2月2日		
R11	梁綸卿 [同泰号書柬]	同順泰本号傑生賢弟	2月4日	5号	
R12	梁綸卿 [同泰号書柬]	同順泰本号傑生賢弟	2月10日	6号	
R13	陳達生 [祥隆号書柬]	傑生仁兄大人	庚2月11日		
R14	群枝 [全州同順泰]	(破損)	癸2月5日		漢城同順泰宛か(内容より)
R15	泰芬	傑生叔台大人	癸卯1月3日	12号	
R16	李静波 [群山同順泰書柬]	傑生叔大人	癸卯1月6日	166号	
R17	群枝 [全州同順泰]	傑生叔台大人	癸1月8日	15号	
R18	李静波 [群山同順泰]	傑生叔大人	癸卯1月10日		
R19	李静波 [群山同順泰]	傑生叔大人	癸卯1月10日		R18の追伸か
R20	(破損)	傑生叔台大人	(破損)	13号	
R21	李静波 [群山同順泰]	傑生叔大人	乙巳8月8日	337号	
R22	李偉初 [偉初敬緘]	傑生 [以下損傷]	8月3日		
R23	李偉初 [偉初敬緘]	傑生仁兄大人	8月13日		
R24	羅明階書柬]	傑生仁兄大人	4月24日		
R25	何錦垣	傑生仁翁大人	4月29日		
R26	黎子祥	傑生仁兄郷大人	8月7日		「勅于元山領署」
R27	[上海北頭同泰号]	漢城同順泰宝号	壬8月24日	14幫	「艚口單」。(壬申)印あり
R28	常鎔 [全州同順泰書柬]	傑生叔台大人	乙9月9日	5号	
R29	廷唐	傑生叔台大人	9月24日		
R30	玉階 [横浜福和号書柬]	傑生宗兄大人	12月11日		
R31	羅耀箴 [元山同豊泰書柬]	傑生仁兄大人	8月8日		
R32	羅耀箴 [元山同豊泰書柬]	傑生仁兄大人	10月24日		
R33	玉階 [横浜福和号書柬]	傑生宗兄大人	12月4日		
R34	陳達生 [祥隆号 神戸海岸六十五番]	傑生仁兄大人	12月18日		
R35	陳達生 [祥隆号 神戸海岸六十五番]	傑生仁兄大人	12月25日		
R36	(破損)	(破損)	12月2日	168号	
R37	陳達生 [祥隆号 神戸海岸六十五番]	傑生仁兄大人	12月27日		
R38	仁庄	漢庄	(月欠)8日		
R39	[横浜福和号書柬]	同順泰宝号傑生仁兄大人	乙6月24日	1幫	「艚口單」
R40	劉時高		甲午4月22日		

S冊 (表題「同泰来信 単／乙巳正月／至五月」)

番号	発信者	受信者	発信日	連番	その他
S01	群枝 [全州同順泰書柬]	傑生叔台大人	乙1月23日	20号	
S02	陳達生 [神戸祥隆号書柬]	傑生仁兄大人	乙3月9日		
S03	陳達生 [神戸祥隆号書柬]	同順泰大宝号傑生仁兄大人	3月27日		
S04	陳達生 [神戸祥隆号書柬]	同順泰大宝号傑生仁兄大人	乙4月13日		
S05	潘達初 [長崎万昌和]	傑生仁兄大人	3月21日		
S06	潘達初 [長崎万昌和]	傑生仁兄大人	4月8日		

S07	羅子明 [香港上環安和泰書東]	傑生仁兄大人	3月2日	86号	
S08	羅子明 [香港上環安和泰書東]	傑生仁兄大人	4月18日	87号	
S09	羅子明 [香港上環安和泰書東]	傑生仁兄大人	5月19日	88号	
S10	子明 [香港上環安和泰書東]	傑生仁兄大人	6月2日	89号	
S11	羅子明 [香港上環安和泰書東]	傑生仁兄大人	6月8日	90号	
S12	羅耀箴 [元山同豐泰書東]	傑生仁兄大人	2月15日		
S13	羅耀箴 [元山同豐泰書東]	傑生仁兄大人			
S14	瑞雲	傑生叔台大人	6月1日		
S15	永祥 [李瑞雲書東]	傑生叔台大人	3月22日	不列幫	
S16	瑞雲	傑生叔台大人	6月17日		
S17	陳祺思 [■]	傑生叔台大人	乙 (月欠) 25日		
S18	秀枝	傑生仁兄大人	乙巳3月22日		
S19	梁綸卿 [同泰号書東]	傑生賢內弟 象番賢內侄	2月19日	621号	
S20	梁綸卿 [同泰号書東]	傑生內弟 象番內侄	2月27日	622号	
S21	梁綸卿 [同泰号書東]	傑生內弟 象番內侄	3月5日	623号	
S22	梁綸卿 [同泰号書東]	傑生內弟 象番內侄	3月22日	624号	
S23	梁綸卿 [同泰号書東]	傑生內弟 象番內侄	4月8日	625号	
S24	梁綸卿 [同泰号書東]	傑生內弟 象番內侄	4月22日	626号	
S25	梁綸卿 [同泰号書東]	傑生內弟 象番內侄	4月23日	不列号	
S26	[同泰号書東]		4月22日		
S27	梁綸卿 [同泰号書東]	傑生內弟 象番內侄	5月7日	627号	
S28	梁綸卿 [同泰号書東]	傑生內弟 象番內侄	5月8日	628号	
S29	梁綸卿 [同泰号書東]	傑生內弟 象番內侄	5月17日	629号	
S30	梁綸卿 [同泰号書東]	傑生內弟 象番內侄	5月27日	630号	
S31	梁綸卿 [同泰号書東]	傑生內弟 象番內侄	5月28日	631号	
S32	梁綸卿 [同泰号書東]	傑生內弟 象番內侄	6月11日	632号	
S33	梁綸卿 [同泰号書東]	傑生內弟 象番內侄	6月24日	633号	
S34	瑞雲 [李瑞雲書東]	傑生叔台大人	3月6日		
S35	羅耀箴 [元山同豐泰書東]	傑生仁兄大人	5月27日		